はじめに

本講座では、実際の私立大学・国公立大学の入試問題を使用して、設問形式別に演習に取り組みながら、各設問の解き方の確認をします。

通期の「読解講座」でも様々な設問の解き方をお伝えしてきましたが、志望大学の入試過去問に取り組みだす前に、再度、設問形式別にきちんと解く力がついているか確認しておきたいという人対象に、「通年講座」から「志望大過去問」への橋渡し的役割の講座です。

具体的には「単語」、「現代語訳・解釈・意味」、「指示内容」、「空欄補充」、「心情・理由説明」、「内容説明」、「内容合致」、「古文常識問題」の八項目に分けて、各設問を複数題まとめて演習できる構成です。

前から順番に実施していく必要はありません。苦手な設問から実施するもよし、得意なものから確実につぶしていくもよし、もちろん第一講から順番にこなしていってもよいです。好きなところから始めてください。

対象は、受験に古文が必要な人（共通テストのみの人・私立大学志望者・国公立大学志望者問わず）全員です。

選択肢問題だけではなく、記述問題も扱っています。

本番で記述不要の人もいるはずですが、是非、記述問題にもチャレンジしてみてください。模範解答のような完璧な解答を書こうとしなくてもかまいません。箇条書きでポイントを書くだけでもよいです。

自分で答えが書けるからこそ、正しい選択肢が選べるのです。

記述が必要な人は、字数制限などがあれば、それも意識して取り組んでください。

それでは、どんな設問でも自信を持って解答できるよう、力をつけていきましょう！

目次

第一講　単語 …… p. 4
第二講　現代語訳・解釈・意味 …… p. 14
第三講　指示内容 …… p. 28
第四講　空欄補充 …… p. 41
第五講　心情・理由説明 …… p. 48
第六講　内容説明 …… p. 59
第七講　内容合致 …… p. 66
第八講　古文常識問題 …… p. 72

国公立大・私立大 古文対策講座

〈設問形式別演習〉

第一講　単語

一　傍線部の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

問1　「今日は術(ずち)なし。右の大臣にまかせ申す」

ア　手続きがわからない　イ　どうしようもない
ウ　名案がない　エ　異論がない

問2　「かたみにもの恥づかしく胸つぶれて、…」

ア　別れの記念に　イ　おたがいに
ウ　緊張して　エ　遠慮して

問3　「出でがてに、御手をとらへて…」

ア　月を待って　イ　戸のところで　ウ　帰るついでに
エ　いつものように　オ　立ち去りにくそうに

問4　「夜すがら物がたり聞かん。」

ア　真夜中に　イ　夜になったら　ウ　毎晩
エ　一晩中　オ　夜になるまで

問5 「夜を昼にて告げに遣はしたれば、…」

ア　不眠不休で　イ　半信半疑で　ウ　あべこべに
エ　奇跡的に　オ　内密に

問6 「つとめてなど、いとあはれなり。」

ア　早朝　イ　心づかい　ウ　使用人
エ　夕暮れ　オ　海女

問7 「小童(こわらは)一人、供に具して、とかく歩きけるが、…」

ア　あちらこちらに　イ　威厳を持って　ウ　いやいやながら
エ　ただなんとなく　オ　よろめきつつ

問8 「あさましきことなりかし。」

ア　もの足りない　イ　けなげな　ウ　気の毒な
エ　勇ましい　オ　あきれた

問9 「さすがゆかしくて、さし寄りて見たれば、…」

ア　変に思って　イ　うれしくて　ウ　尊く感じて
エ　同情して　オ　心ひかれて

問10 「女はなほおぼろけの心ならじ。」

ア　長年の自信　　イ　明確な決意　　ウ　並一通りの覚悟

エ　はっきりした自信　　オ　ぼんやりした不安

二　次のそれぞれの問に答えよ。

問1　「大きなりなどもおろかなり」の意味内容として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　蛇は、死なせてしまうには惜しいほどの大きさであった
イ　蛇は、確かに大きかったが、騒ぎ立てるほどではなかった
ウ　蛇は、何とも言い表すことができないほどの大きさであった
エ　蛇は、大きな木の根に勝るとも劣らないほどの大きさであった
オ　蛇は、大変な大きさであったが、十分な知恵を備えていなかった

問2　「なま夕暮れになりにけり。」の傍線部の表している状態として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　すっかり日が暮れてしまった状態
イ　日が暮れても涼しくならない状態
ウ　夕暮れであることが実感できる状態
エ　夕暮れになったばかりの状態
オ　夕暮れになりきっていない状態

問3　「誰てふ烏滸（をこ）の者かさる卑しげなる名はつけけん」の傍線部を現代語訳せよ。

問４　次の文章を読んで、傍線部Ａ、Ｂの解釈として最適な組み合わせを、後の中から選べ。

「西明寺の入道、ある宵(よゐ)の間(ま)に呼ばるる事ありしに、『<u>やがて</u>(Ａ)』と申しながら、直垂(ひたたれ)のなくて、とかくせしほどに、また使(つかひ)来て、『直垂などのさぶらはぬにや。夜(よる)なれば、異様(ことやう)なりとも。<u>とく</u>(Ｂ)』とありしかば、…

ア　Ａ　そのままの格好で参ります　　Ｂ　くつろいだ格好でおいで下さい

イ　Ａ　すぐに参ります　　Ｂ　急いでおいで下さい

ウ　Ａ　間もなく参ります　　Ｂ　説明は後ほど致します

エ　Ａ　そのうちに気が向いたら参ります　　Ｂ　帯など解いたままでおいで下さい

オ　Ａ　他の誰でもなく私自身が参ります　　Ｂ　素早く行動なさって下さい

三 傍線部の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

問1 「(注)今日は凶しき日、明日八日なれば、九日のつとめて、関白殿より、さまざまの魚(いを)ども持て参りたれど、…」

注　今日は凶しき日、明日八日なれば…今日も明日も同じく凶日なので。

ア　翌朝　　イ　終日　　ウ　早晩　　エ　早朝　　オ　昼夜

問2 「まことに、かなしからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。」

ア　面倒な　　イ　愛する　　ウ　哀れな　　エ　瀕死の　　オ　悲しい

問3 「あやしの(注)薦(こも)引き回したる中に、人ある気色して、前にことやうなるものさし出だして、食ひ物の端々(はしばし)受け集めて置きたるありけり。」

注　薦…むしろ。

ア　不思議な　　イ　みすぼらしい　　ウ　ありふれた
エ　見慣れない　　オ　きれいな

問4　「あるじなどし、人々もの食ひて、騒がしきこと…」

ア　饗応　　イ　居住　　ウ　差配
エ　主人　　オ　紹介

問5　「同じ御時、小川滝口定継といふ御気色よきぬし侍りけり。四臈座にて、上臈を越して久しく奉公して候ひけり。」

注　同じ御時…順徳天皇の在位のとき。
　　滝口…警備の武士。
　　四臈座…第四番目の地位。

ア　御趣味　　イ　御容貌　　ウ　御意向
エ　御信任　　オ　御人柄

四 次の文章は、寿永二（一一八三）年、源氏に攻められた平家が都落ちをする場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

畠山庄司重能（しげよし）、小山田の別当有重（ありしげ）、宇都宮左衛門朝綱（ともつな）、これ三人は去（さ）んぬる治承三年より召し籠められてありしを、大臣殿ばかり「これらが首（かうべ）を刎（は）ねらるべし」とのたまひけるを、平大納言と新中納言と申されけるは「これら百人千人を斬（き）らせたまひて候ふとも、御運尽きさせたまはん後は世を取らせたまはんことかたかるべし。国に候ふなる彼らが妻子ども、さこそ嘆き候ふらめ。今や今やと待ち候ふらんところに、斬られたりと聞こえしかば、いかばかり嘆き候はんずらん。これらをば東国へ返しつかはさるべしとおぼえ候ふ」とひらに申されければ、大臣殿「げにも」とて、これら三人を召し寄せてのたまひけるは「<u>いとまを賜（た）ぶ</u>。急ぎ下れ」とのたまへば、三人の者どもかしこまつて申しけるは「いづくまでも行幸の御供つかまつるべき」よしを申す。

注　治承三年……一一七九年。
大臣殿……前内大臣平宗盛。
平大納言……平時忠。宗盛の叔父。
新中納言……平知盛。宗盛の弟。

問 傍線の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　追放する　　イ　休暇をいただく
ウ　支度をせよ　　エ　切腹を命ずる

五

問1　次の文章を読んで、傍線部の解釈として最も適当なものを後の中から選べ。

いとつれづれに世の中のうらめしきことのみ思へば苦しきを、行ひは許されず、「心慰めに、東（あづま）の方へまからむ」と、親に申しければ、…

ア　朝廷の仕事に励むこと
イ　故郷を捨て唐土（もろこし）まで行くこと
ウ　一旗揚げに東国まで行くこと
エ　出家し仏道修行をすること

問2　「雲井の花を見し昔は、同日同夜の上日にひまなく、仙洞の月をながめし中ごろは、白浪の音をたてじと営みし程に」は、主人公（平康頼）のどのような人生経験を反映しているか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

ア　学業　　イ　交友　　ウ　趣味
エ　職業　　オ　生育

問３　傍線部「寂しき床（とこ）」とあるが、本文中にはこれとほぼ同内容の語句が用いられている。その語句を抜き出せ。

常よりも、風さへ心細き夜、御袖の氷もいと溶けがたう、明かしかねさせ給ひて、まだ明け暗（ぐれ）のほどに、内裏（うち）より、

「片敷きの冴ゆる霜夜の衣手にかかる涙の色を見せばや
寂しき床（とこ）は変はらずと、あらぬ思ひや立ち添ふらん」

注　あらぬ思ひ…私ではない他の人への思い。

第二講　現代語訳・解釈・意味

一

問1　「まどろませたまふことかたし」の現代語訳として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　意識をはっきりお示しになることが難しい。
イ　お眠りになることが難しい。
ウ　うとうとなさることが確実である。
エ　横たわったまま長い時間を過ごされる。
オ　起きていらっしゃることが困難である。

問2　「心得てけり、とおぼすに、え堪へずしほたれ給ひて」の解釈として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　帝は、中納言が自分の心中を理解しているとお思いになるにつけ、こらえられずに涙で袖をお濡（ぬ）らしになって
イ　中納言は、帝はもしかしたら自分が唐の国に来て契った女のことを知っているのではないかと内心気にされて
ウ　帝は、中納言が風流を解する人だとお思いになって、こらえきれず后に会えない不満をくどくどとおっしゃって
エ　中納言は、比翼の鳥とは日本の遠山鳥だとお思いになって歌を詠んだものの、自信がなくてしょんぼりされて
オ　帝は、后に対する恋慕の情を中納言が分かってくれたとお思いになったが、我慢できず直接言葉でおっしゃって

問3　「かくな言はせそ」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　こんな残酷なことを言わないでくれ。
イ　こんなでたらめなことを言ってはいけない。
ウ　こんな恨みごとを言われる筋合いはない。
エ　こんな泣きごとを言わせておいてはだめだ。
オ　こんな頼みごとは勝手に言わせておけ。

問4　「おのれも慎まば、右大将のために悪(あ)しうもこそあれ。」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　私が身を慎むのは、右大将に具合の悪いことが起こってほしいと思うからだ。
イ　私が身を慎むことは、右大将のためにならないはずがない。
ウ　私が身を慎んだならば、右大将にとってよくないことになると大変だ。
エ　私も一緒に身を慎むと、右大将は気を悪くするに違いない。
オ　私が身を慎まないことに、右大将は機嫌を損ねるだろう。

問５　「うちかたぶきて過ぐし侍らんは、いとなめし」の意味として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　経済的負担をお願い申し上げるのは、まったく不本意だ
イ　知らぬ顔をして通り過ぎましたなら、たいへんに失礼だ
ウ　被害をおかけするようになりますと、極めて心ぐるしい
エ　疑問に思いつつ日々過ごしますのは、とても堪えがたい

問６　次の傍線部を現代語訳せよ。

「とうまかりね。」とてこそやりてけれ。

二

問1　次の文章を読んで、傍線部の意味として最適なものを後の中から選べ。

「さて誰かれを送らせん」といふに、「いな、とくより心がまへせし」とて、菅の笠、竹の杖、その外、旅の調度などをみするに、家こぞりて感じつつ、日をえらびて出立せしむ。

ア　家の者は皆、その提案に賛成して、都合の良い日を選んで揃って出立することにした。
イ　家の者は皆、その旅支度の調度品に感心しつつ、天気の良い日を選んで出立した。
ウ　家の者は皆、その決意に心を動かされて、吉日を選んで出立させた。
エ　家の者は皆、その準備に感嘆して、日程を調整して供とともに出立させた。
オ　家の者は皆、その常の配慮を感じて、都合をつけて出立しようとした。

問２　次の文章を読んで、傍線部の意味として最も適切なものを後の中から選べ。

季札、帰り来りて、こひし剣をとらせんがために、徐君をたづぬるに、「はやくうせにき」といひければ、徐君がつかをたづねてぞ、こひける太刀をかけはべりける。

ア　すでに死んでしまった。
イ　どこかへ行ってしまう。
ウ　とっくに姿をかくした。
エ　もう無くしてしまった。

問３　次の文章を読んで、傍線部の解釈として最も適切なものを後の中から選べ。

少将の内侍、＊台盤所の＊御壺の楓（かへで）の木を見出して、「この楓に、初紅葉のしたりしこそ失せにけれ」といひたりけるを、頭の中将聞きて、「いづれの方にか候ひけむ」とて、梢（こずゑ）を見上げければ、人々もみな目をつけて見けるに、蔵人永継とりもあへず、「西の枝にこそ候ひけめ」と申したりけるを、…

＊台盤所　清涼殿の一室で、女房たちの詰所。
御壺　壺のように小さく仕切られた前庭。

ア　どちらかの庭に楓の木があったそうです。
イ　どちらの部屋に少将の内侍がいらしたのか。
ウ　どちらかの側の梢を御覧になったようです。
エ　どちらの方角に初紅葉があったのでしょうか。
オ　どちらの部屋の人々が感動したのでしょうか。

問４　次の文章を読んで、傍線部の現代語訳として最も適当なものを、後の中から選べ。

※二人が云ふ。「この米、価（あたひ）たかく買はん。売れ」とて、金一ひら投げ出（い）だす。〈中略〉武士（もののふ）云ふ。「米の価わづかに、金一両出だされたるは、富貴の人の旅ゆくにもあらず。心はやりてばくち打ち、又盗みしてあぶれあるくか」と問ふ。村雲答ふ。「ぬす人也。※よんべ幸ひ得て、金あまたの※わらづとにあり。多きも煩はしとて、いかでつかひ棄てんとす」と云ふ。

注　二人…はん噲（かい）と村雲。盗人。
　　よんべ…昨夜。
　　わらづと…わらで編んだ物を包むもの。

ア　どうにかして使いきってしまうつもりだ
イ　どうしても使い捨てることができないだろう
ウ　どうやって使い捨てたらよいのだろう
エ　どうして使いきろうとするのだろうか

問5　次の文章を読んで、傍線部を現代語訳せよ。

男にいひけるやう、「津の国といふ所の、いとをかしかなるに、いかで難波に※祓へしがてらまからむ」といひければ、「いとよきこと。われももろともに」といひければ、「そこにはなものしたまひそ。おのれひとりまからむ」といひて、いでたちていにけり。

※　祓へ（はらへ）＝神に祈って穢れ（けがれ）を除く神事。

三

問1　次の文章は、『住吉物語』の一節で、中納言が亡き妻との間の娘である対（たい）の君を入内（じゅだい）させることについて、北の方（継母）に相談するところから始まる。これを読んで傍線部の解釈として最も適当なものを、後の中から選べ。

かくしつつ明かし暮らすほどに、九月にもなりぬ。中納言、北の方にのたまふやう、「行く末は知らず、(注1)二人の女（むすめ）は<u>ありつきぬ</u>。この対の君を、今年の(注2)五節（ごせち）に内裏（うち）へ参らせばやと思ふなり。同じ御心ならぬ、心憂さよ」とのたまへば、…

注　1　二人の女…北の方（継母）が生んだ二人の娘たちのこと。
　　2　五節…陰暦十一月、新嘗（にいなめ）祭・大嘗（だいじょう）祭の時に朝廷で行われた、五節の舞を中心とした行事。

ア　健康に育った
イ　結婚した
ウ　成人した
エ　宮仕えした
オ　美しくなった

問２　次の文章を読んで、傍線部にはどのような意味が込められているか、最も適当なものを後の中から選べ。

女、

人のあきに庭さへ荒れて道もなく蓬（よもぎ）茂れる宿とやは見ぬ

と書きて出だしけれど、もの書くべき具さらになかりければ、たゞ口うつしに、男、

誰（た）があきにあひて荒れたる宿ならむ我だに庭の草は生ほさじ

ア　足繁くここに通うでしょう

イ　情趣のある庭になるでしょう

ウ　花の時期が楽しみでしょう

エ　人の噂にはならないでしょう

オ　不実な人間だと思うでしょう

問３　次の文章を読んで、傍線部の具体的な意味として最も適切なものを後の中から選べ。

この帝、世をしらせ給ひて後、世の中みな治まりて、今に至るまでそのなごりになむ侍りける。〈中略〉東宮におはしましける時、世のへだて多くおはしましければ、危ふく思ほしめしけるに、検非違使の別当にて経成といひし人、直衣に柏夾して、白羽の胡簶負ひて参りて、中門の廊にゐたりける日は、いかなる事の出で来ぬるぞ、と宮の中、女房よりはじめて、隠れ騒ぎけるとかや。〈中略〉重く過ちたる者の、おはします近きあたりに籠りたりければ、うち包みたりけるも、もし東宮に逃げ入ることやある、とて参りたりけるなりけり。かやうにのみ危ぶませ給ひて、東宮をも捨てられやせさせ給はむずらむ、と思ほしけるに、殿上人にて衛門権佐行親と聞こえし人の、相よくするおぼえありて、いかにも天の下しろしめすべき由、申しけるかひありて、かくならびなくぞおはしましける。

注　この帝…後三条天皇（一〇三四〜一〇七三）のこと。
世のへだて…妨げとなるもの。具体的には、東宮に敵対する勢力のこと。
検非違使の別当…検非違使庁の長官。
経成といひし人…源経成。一〇五〇年から一〇六四年まで検非違使の別当。
柏夾…冠の後方に垂らす纓を、非常時に折りたたんで留めるための道具。
衛門権佐行親……平行親。

ア　検非違使が武器をもって攻めてくるという難事をお思いになる。
イ　重罪を犯した者が東宮の御所へ侵入する危険性をお思いになる。
ウ　周辺の女房たちの落ち着かない様子から不安だとお思いになる。
エ　敵対者が東宮との対立をふかめるのではないかとお思いになる。
オ　東宮の位にあり続けることに困難があるだろうとお思いになる。

四 次の文章は、『増鏡』の一節で、後宇多法皇の病が重篤になったことが述べられた後に続く場面です。これを読み、後の問に答えなさい。

そののち御孫の(注1)春宮行啓(とうぐうぎやうけい)あり。世をしろしめさむ時の御心づかひなど、いま少し細やかに聞こえしらせ給(たま)ふ。宮は、(注2)先帝の御かはりにも、いかで心の限りつかうまつらんと、(a)あらまし思されつるに、あかず口惜しうて、いたう(b)しほたれさせ給ふ。

〈中略〉

心細ういみじとのみ思さるるに、正中(しやうちゆう)元年六月二十五日、つひに隠れさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。

〈中略〉

御四十九日は八月十日余りの程なれば、世の気色なにとなくあはれ多かるに、女院、宮たちの御心の中(うち)ども、朝霧よりも晴れ間なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の位の御時に、宰相典侍(さいしやうのてんじ)とて侍(さぶら)ひしは、雅有(まさあり)の宰相の女なり。その世の古き友なれば、同じ心ならんと思しやるもむつましくて、万秋門院のたまひつかはす。

(A)仰ぎ見し月もかくるる秋なればことわりしれとくもる空かな

いとあはれに悲しと見奉りて、御返し、宰相典侍、

(B)光なき世はことわりの秋の月涙そへてやなほくもるらん

(注1)　春宮(とうぐう)　後二条天皇の皇子・邦良(くによし)親王。

(注2)　先帝　邦良親王の父・後二条天皇。

問1　傍線部（a）（b）を現代語訳しなさい。

（a）＝

（b）＝

問2　和歌（A）（B）について、比喩表現を踏まえて現代語訳しなさい。

（A）＝

（B）＝

第三講　指示内容

一

問1　次の文章を読んで、傍線部の本文中の意味として最も適切なものを後の中から選べ。

*後堀河院御位の時、嘉禄二年九月十一日、*例幣に頭の中将宣経（のぶつね）朝臣以下、*職事（しきじ）ども参りて*出御（しゅつぎょ）待つほど、人々、*鬼の間に集まりゐて、何となき物語しけるに、*台盤所には*内侍ども、<u>さらぬ</u>女房たちも候ひけり。*渡殿には、*貫首（くわんじゅ）に従ひたる蔵人ども並びゐて、内も外もなく、さまざまの物語いひ交はすに、…

＊後堀河院…鎌倉時代の第八十六代天皇。
＊職事…蔵人の総称。
＊鬼の間…清涼殿の西廂（ひさし）の南端にある部屋。
＊内侍ども…内侍所に務めている女房たち。
＊貫首…蔵人の頭の別称で、ここでは宣経のこと。
＊例幣…毎年九月十一日に朝廷から伊勢神宮に幣を奉納すること。
＊出御…天皇のお出まし。
＊台盤所…清涼殿の一室で、女房たちの詰所。
＊渡殿…寝殿造りで、建物と建物とをつなぐ屋根のある廊下。

ア　いつもと違う　　イ　重要でない　　ウ　退出しない
エ　内侍ではない　　オ　物語をしない

問２　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

歌川はもと越前の国三国（みくに）の花街（くるわ）、荒町屋某がもとの遊女、泊瀬川（はせがは）と云ふ。容色ありて、心ばへうるはしく、香、茶、花、手跡ともに志すといへども、最も性、俳諧を好めり。後、薙髪（かみおろ）して歌川（かせん）といふ。いまださかりなりし時、東都某の士夫、三国に来りてことに睦びけり。其時、泊瀬川いふ、「妾（せふ）、吾妻を一見せむと願ふこと久し、もし時をえて遊びなば、君が*第にとどめ給はんや」といふに、こころよくうけひきぬ。其後、東国の人とだに聞けば、必ずこのことを約し置けり。

*第＝屋敷。

問　傍線部「このことを約し置けり」とはどういう意味か。最適なものを次の中から選べ。

ア　もし東国へ帰るのであれば、自分を妻にして欲しいと頼んだ。
イ　もし東国へ行くことがあれば、物見遊山に連れて行ってほしいと頼んだ。
ウ　もし自分が東国へ行くことがあれば、家に泊めて欲しいと頼んだ。
エ　もし自分が東国へ行くことがあれば、俳諧の指導をして欲しいと頼んだ。
オ　もし東国へ帰るのであれば、機会があれば、連絡をして欲しいと頼んだ。

問3　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ある時、主人の前に出て、「こたび君の御蔭にて、かたがた残りなくみめぐり、としごろの本意もとげ、かつ、おもひもかけぬ御あたりの御恵を蒙りぬ。国にて約せし日数も、今はみちなんとすれば、いとま給ひなん」といふに、あるじ「そのこと はすこしも心にかくべからず。別に人をもて国人にいはせぬ」とて、せちにとどめ給へば、…

問　傍線部「そのこと」とはどういうことか。最適なものを次の中から選べ。

ア　宿の主人と長逗留の間に打ち解けて、別れるのがつらいということ
イ　宿の主人に、長逗留の間、思いがけない歓待を受けたこと
ウ　宿の主人のおかげで、東国で行きたい場所を残りなく巡れたこと
エ　宿の主人とともに、俳諧修行の念願を果たしたこと
オ　宿の主人にすっかり世話になった上、国の亭の主と約束した期日が迫ったこと

問４　次の文章を読んで、傍線部「かかる事」の内容として最も適切なものを後の中から選べ。

東宮におはしましける時、世のへだて多くおはしましければ、危ふく思（おも）ほしめしけるに、検非違使（けびゐし）の別当にて経成（つねなり）といひし人、直衣（なほし）に柏夾（かしはばさみ）して、白羽（しらは）の胡籙（やなぐひ）負ひて参りて、中門（ちゆうもん）の廊にゐたりける日は、いかなる事の出で来ぬるぞ、と宮の中、女房よりはじめて、隠れ騒ぎけるとかや。おはします所、二条東洞院なりければ、そのわたりを軍（いくさ）のうち廻（めぐ）りて包みたりければ、「**かかる事**こそ侍れ」など申し合へりけるほどに、別当の参りたりければ、東宮も御直衣たてまつりなどして、御用意ありけるに、別当の、検非違使召して、「犯しの者は召し捕（と）りたりや」と問はれければ、「既に召して侍り」といひければこそ、ともかくも申さでまかり出でられにけれ。

世のへだて……妨げとなるもの。具体的には、東宮に敵対する勢力のこと。　検非違使の別当……検非違使庁の長官。
経成といひし人……源経成。一〇五〇年から一〇六四年まで検非違使の別当。
柏夾……冠の後方に垂らす纓（えい）を、非常時に折りたたんで留めるための道具。　軍……矢を射る人たち。軍勢。
検非違使召して……ここでは、検非違使庁の一役人を呼びつけて、の意。

ア　検非違使の別当が中門の廊にやって来ていること。
イ　検非違使の役人が東宮の御所を包囲していること。
ウ　敵対する勢力が東宮の御所を攻めてきていること。
エ　女房らが恐がって隠れたり騒いだりしていること。
オ　犯人を追う役人たちがその行方を探っていること。

問5　次の文章は、九条殿藤原師輔について述べたものである。傍線部「さらざらましかば」とあるが、具体的にはどのようなことをいうのか、後の中から最も適切なものを一つ選べ。　※本文一部中略

いにしへより今にかぎりもなくおはします殿の、ただ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心憂く口惜しきことにてはおはしますといへば、侍、されど、ことの例には、まづその御時をこそは引かるめれといへば、それは、いかでかはさらでは侍らん。そのみかどのいでおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。さらざらましかば、このごろわづかにわれらも所々の御前、雑役につられ歩きなましとこそ、入道殿は仰せられければ、…

（大鏡）

冷泉院…冷泉天皇。第六三代天皇。九五〇～一〇一一。在位は九六七～九六九。母は師輔女安子。
入道殿…藤原道長。九六六～一〇二八。父は師輔男兼家。

ア　もしも九条殿がいらっしゃらなかったら。
イ　もしも冷泉天皇の事例を引かなかったら。
ウ　もしも冷泉天皇が即位なさらなかったら。
エ　もしも摂関家が栄えることがなかったら。

二

問1 左の文章は、『住吉物語』の一節で、中納言が亡き妻との間の娘である対(たい)の君を入内(じゅだい)させることについて、北の方（継母）に相談するところから始まる。これを読んで、傍線部の内容として最も適当なものを後の中から選べ。

かくしつつ明かし暮らすほどに、九月にもなりぬ。中納言、北の方にのたまふやう、「行く末は知らず、(注1)二人の女(むすめ)はありつきぬ。この対の君を、今年の(注2)五節(ごせち)に内裏(うち)へ参らせばやと思ふなり。同じ御心ならぬ、心憂さよ」とのたまへば、継母、わが子たちに思ひまし給へるを、ねたしと思ひながら申すやう、「なかなかおぼえ少なき宮仕へよりも、時めく(注3)上達部(かんだちめ)などにあはせ給へかし」とのたまへば、中納言、「なみなみならむ人には、見せむ事はあらじとて」などのたまへば、〈中略〉継母ともに営む気色(けしき)にて、下には、「いかにしてあやしき名を立てて、思ひ疎ませむ」とおぼしけり。

中納言、霜月のことなれば、このことのみ急がるるに、わが子どもにはまさりてあらむことをそねみ、「(注4)人笑はれ草になさむ」と思ひ、…

1　二人の女…北の方（継母）が生んだ二人の娘たちのこと。
2　五節…陰暦十一月、新嘗祭(にいなめさい)・大嘗祭(だいじょうさい)の時に朝廷で行われた、五節の舞を中心とした行事。
3　上達部…公卿の異称。大臣・大納言・中納言・参議および三位以上の者をいう。
4　人笑はれ草…笑われ者のこと。

ア　対の君を入内させること
イ　北の方を納得させること
ウ　北の方の真意を探ること
エ　対の君の不満を解消すること
オ　対の君の意志を確認すること

問２　次の文章を読んで、傍線部の解釈として最も適当なものを、後の中から選べ。

昔、(注1)空也上人、(注2)山の中におはしけるが、常には、「あなもの騒がしや」とのたまひければ、あまたありける弟子たちも、慎みてぞ侍りける。度々かくありて、ある時、かき消つやうに失せ給ひにけり。心の及ぶほど尋ねけれども、さらにえ会ふこともなくて、月ごろになりぬ。さてしもあるべきならねば、みな思ひ思ひに散りにけり。

１　空也…平安時代の僧。浄土教の先駆者。
２　山…比叡山延暦寺。

ア　空也上人を探し続けてもいられないので
イ　空也上人に頼ってばかりではよくないので
ウ　空也上人が戻って来るとは期待できないので
エ　空也上人は生きていないのかもしれないので
オ　空也上人とどこかで会わないとも限らないので

問3　次の文章は、宮仕えに出ている作者が、同僚の女房とともにいるところに、ある殿上人（男性）が訪問してきたところである。これを読み、後の問いに答えよ。

上達部、殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば、*うひうひしき里人は、ありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月ついたちごろのいと暗き夜、*不断経に、声よき人々読むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかりたち出でて聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、参りたる人（A）のあるを、「逃げ入りて、局なる人々呼び上げなどせむも見苦し。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」と言ふ*いま一人のあれば、かたはらにて聞きゐたるに、おとなしく静やかなるけはひにてものなど言ふ、くちをしからざなり。「いま一人は（B）」など問ひて、世のつねのうちつけのけさうびてなども言ひなさず、世の中のあはれなることどもなどこまやかに言ひ出でて、さすがにきびしう引き入りがたきふしぶしありて、われも人も答へなどするを、…

*うひうひしき里人…作者のこと。
*不断経…昼夜絶えず僧たちに経を読ませる仏事。
*いま一人…同僚の女房。

問　傍線部A「参りたる人」、傍線部B「いま一人」が指し示す人物は、それぞれ誰か。次の中から選べ。

ア　作者　　イ　同僚の女房　　ウ　客人に対面する役の女房
エ　殿上人　　オ　読経をする人

A＝　　B＝

問４　次の文章は『西行物語』の一節である。これを読んで、傍線部「そなた」が何を指すか、答えよ。

かくて、山々寺々を伝ひゆくほどに、四月のはじめばかりに美濃の国まで上りたりけるに、さすが捨てしながらも、都のことどもゆかしくおぼえて、「そなたの便りがな」とうちあらます折節、ほととぎす、一声二声おとづれて過ぎければ、

　ほととぎす都へゆかば言伝てむ越え遅れたる旅のあはれを

問５　次の文章は松尾芭蕉の『笈の小文』の一節である。傍線部「この」が示すものは何か。文中より漢字二字を抜き出せ。

百骸九竅（ひゃくがいきうけう）の中に物あり。仮に名付けて風羅坊（ふうらばう）といふ。まことに羅（うすもの）の風に破れ易からんことをいふにやあらん。彼、狂句を好むこと久し。終（つひ）に生涯のはかりごととなす。ある時は倦（う）んで放擲（はうてき）せんことを思ひ、ある時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に闘（たたか）うて、これがために身安からず。しばらく身を立てんことを願へども、これがために障（さ）へられ、しばらく学んで愚をさとらんことを思へども、これがために破られ、終に無能無芸にしてただこの一筋に繋（つな）がる。

百骸九竅……『荘子』による。人体を構成する多くの骨と九つの穴、転じて人間のこと。
風羅坊……芭蕉の葉が風にもろいことに通じる芭蕉自身の別号。

三

問1　次の文章は、寿永二（一一八三）年、源氏に攻められた平家が都落ちをする場面である。これを読んで、傍線部の指示内容がわかるように、口語訳しなさい。

（前内大臣の平宗盛が）「さて三位の中将はいかに」と問ひたまへば、「小松殿の君達はいまだ一所も見えさせたまはず」と申す。「さこそあらめ」とて、いよいよ心細げに思はれけり。

※三位の中将…平維盛。平重盛の子。
※小松殿…平重盛。宗盛の亡くなった兄。

問2　次の文章を読んで、傍線部「さ言ふばかりの社とも見えず」を、指示語「さ」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

さて、川辺に沿ひつつ少し西に行きて、丹治（たんぢ）といふ所より吉野の山口にかかる。やや深く入りもて行きて、杉むらの中に、四手掛（しでかけ）の明神と申すがおはするは、「吉野山口神社」などにはあらぬにや。されど、さ言ふばかりの社とも見えず。

丹治……吉野にある地名。
四手掛の明神……吉野山の入口あたりにある神社。幣掛神社とも。
吉野山口神社……平安時代の『延喜式』に載る吉野の古い神社。

問3　次の文章を読んで、傍線部を口語訳せよ。

五条わたりに、いと貧しくて住みける女男ありけり。をのこあくまで酒を好みけれど、求むべきやうもあらざりしかば、妻いとわりなしと思ひて、おのが髪半（なか）らばかりを切りて市（いち）に持ち行き、酒にかへて男にすすめぬ。男おどろき、いかにして求め給へるにかと問ふに、しかじかなんしつると語りければ、男さめざめとうち泣き、…

問４　次の文章は、作者（安嘉門院四条）が恋に破れて出家を決意し、主人の邸（やしき）から出奔する場面である。これを読んで、傍線部について、主語・指示語の内容を明らかにして現代語訳せよ。

ただ今も出でぬべき心地して、やをら端を開けたれば、〈中略〉人にや見つけられむとそら恐ろしければ、もとのやうに入りてふしぬれど、傍らなる人うちみじろきだにせず。さきざきも宿直人の夜深く門を開けて出づるならひなりければ、その程を人知れず待つに、今宵しもとく開けて出でぬる音すれば。

注　端…部屋の隅の戸。
　　傍らなる人…同僚の女房。
　　宿直人…警固の役人。

問５　次の文章を読んで、傍線部Ａ・Ｂが指すものをわかりやすく説明せよ。

比（ころ）は二月十日の曙なれば、余寒、猶尽（なをつき）せず、音羽（おとわ）川の流（ながれ）も氷（こほり）つつ、嶺（みね）の嵐（あらし）もいとはげし。道のつららもとけぬが上に、又かきくもり雪ふれば、行（ゆく）べき方（かた）もみえざりけり。子共、しばしは母にすすめられてあゆめ共、後には足（あし）はれ血出（いで）て、或時（あるとき）はたふれ臥（ふし）、或時は雪のうへに居（ゐ）て、「さむやつめたや、A<u>こ</u>はいかがせん」と泣悲（なきかなし）む。母ひとり、B<u>これ</u>を見けん心の中（うち）、いふはかりなし。

Ａ＝

Ｂ＝

第四講　空欄補充

問1　次の文章を読んで、空欄 X ・ Y に入る言葉として最も適当なものを、後の中からそれぞれ選べ。

薬玉に解きかへてぞ捨つ X 。

注　薬玉…薬や香料を入れた袋を造花や糸で飾ったもの。邪気を払い、不浄を避けるものとして柱や簾にかけた。

あはれ此西瓜の赤くてあれかしと思ふこそ、さしあたりての願ひ Y といふ。

X　ア　めり　　イ　める　　ウ　たり
　　エ　たる　　オ　たれ

Y　ア　なり　　イ　なる　　ウ　なれ
　　エ　なし　　オ　なき

問２　次の文章は、石上の中納言が燕（つばめ）の子安貝を取ろうと計画している場面である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

中納言石上麿足（いそのかみのまろたり）の、家に使はるる男どものもとに、「燕の、巣くひ［X］ば告げよ」とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらむ」と申す。答へてのたまふやう、「燕の持たる子安貝を取らむ料なり」とのたまふ。

問　空欄［X］には助動詞「たり」の活用語が入る。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　たら　　イ　たり　　ウ　たる　　エ　たれ

問３　次の空欄［A］に入る最も適切な漢字一字を記せ。

栗といふ文字は西の木と書きて、西方［A］土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用ゐ給ふとかや。

問４　次の文章を読んで、空欄 A ・ B に入る語の組み合わせとして、前後の文脈から考えて最も適切なものを、後の中から選べ。

*はし舟とつけて、いみじう小さきに乗りて漕ぎありく。つとめてなど、いとあはれなり。あとの白波は、まことにこそ消えもていけ。よろしき人は、なほ乗りてありくまじき事とこそおぼゆれ。徒歩路（かちぢ）もまたおそろしかなれど、それはいかにもいかにも地につきたれば、いと A 。
海はなほいと B と思ふに、まいて、海女（あま）のかづきしに入るはうきわざなり。腰につきたる緒（を）の、絶えもしなば、いかにせんとならん。

*はし舟…はしけ舟。陸と停泊中の本船との間を往復して、貨物や旅客を運ぶのに用いる小舟。

ア　A　やすし　　B　はやし
イ　A　ゆゆし　　B　たのもし
ウ　A　はやし　　B　おそし
エ　A　たのもし　B　ゆゆし
オ　A　おそし　　B　はやし

問５　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

都ならねども、年の暮れには、我も我もとその急ぎするも、あはれにおぼえて、

　常よりも心細く［A］おぼえける旅の空にて年の暮るれば

　憂き身［B］厭ひながらもあはれなれ月を眺めて年の暮れぬる

年立ち返りければ、深山辺（みやまべ）の霞もともに思ひ立ち、都の方へゆくほどに、ある野中に、青柳（あおやぎ）のいとおもしろきを植ゑまはし、軒端には小暗きほどに梅を植ゑ並べたるが、花咲き乱れたりければ、人々とどめねど、ゆきもやられぬ匂ひゆかしさに、この伏屋（ふせや）にとどまりけり。

　一人寝（ぬ）る草の枕の移り香は垣根の［C］の匂ひなりけり

　　（注）山賤（やまがつ）の片岡かけて占むる野の境に立てる玉の小［D］

注　山賤――山里に住んでいる身分の低い者。

問一　［A］・［B］にあてはまる係助詞を記せ。

A＝　　　　B＝

問二　［C］・［D］にあてはまる最も適当な漢字一字を文中からさがし、答えよ。

C＝　　　　D＝

問6　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

俊云、前の歌〔＝波寄する海士(あま)の苫屋(とま)の隙(ひま)をあらみ漏るにてぞ知る夜半(よは)の時雨は〕は、時雨すげなき様に聞こゆ。時雨は起きゐて、聞き明かすべき事ならねど、これは漏るに、初めて知るといへば、［Ⅰ］、漏りて衣の濡れければ、起き騒ぐと見ゆ。もし漏らざら［Ⅱ］ば、又の日、人づてにてこそ聞かましと、おぼつかなくぞ聞こゆる。

注　俊云…平安後期の歌人・源俊頼の言うことには。
　　海士の苫屋…茅などを編んだもので屋根をふいたり周囲をかこったりした粗末な漁夫の家。

問一　空欄［Ⅰ］に入る言葉の意味として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　寝入っていたところ
イ　波の音を聞いていたところ
ウ　時雨の音を聞いていたところ
エ　目を覚ましかけていたところ

問二　空欄［Ⅱ］に入る助動詞を適切な活用形にして三文字で記せ。

問7　次の文章を読んで、空欄［A］に入る言葉として、最も適切なものを後の中から選べ。

豊の明かりの節会の夜、さえかへりたる有明に（通宗中将が）まゐられたりしけしき、優なりしを、ほどなくはかなくなられにしあはれさ、あへなくて、その夜の有明、雲のけしきまで、形見なるよし、人々つねに申し出づるに、

露ときえ煙ともなる人はなほ［A］あとをながめもすらむ

思ひいづることのみぞただためしなきなべて［A］ことを聞くにも

ア　うれしき　　イ　やましき
ウ　こちたき　　エ　はかなき

問8　次の文章を読んで、空欄［A］に入る語として、最も適切なものを後の中から選べ。

星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつつ、木の葉にかかる音のをかしきを、「なかなかに艶(えん)にをかしき夜かな。月のくまなく明(あか)からむも［A］まばゆかりぬべかりけり」。

ア　をかしく　　イ　さやかに　　ウ　あはれに
エ　はしたなく　　オ　つきづきしく

問９　次の文章は幕末期福岡の歌人大隈言道の歌話の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

己(おの)が家せまくいやしきは言ふもさらなれど、山野およそ十里あまりの眺望ありて、〈中略〉よく見え、橋も四つ五つ、行く人なども見え、月に［ a ］雪に［ b ］ば、随分の美観なるを、［ c ］ともあしとも言はずして帰る人あり。また折々訪ふ人とても、日々のさまは見まほしかるべきを、障子をだに開けずして帰るあり。

［ Ⅰ ］はさもあるべし。詩歌のことなどを飽くばかり語らひて、風景を見ずして帰るはいかにぞや。〈中略〉

古今集に

　女郎花吹き過ぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

これは女郎花の香(か)をかぎ知れるなり。すべて梅の香は言ふもさらにて、藤の花、菊の花、いづれも異なる香のするを、［ Ⅱ ］はよくかぎ知りてぞありけん。これも花を賞(め)づるよりのことなり。この歌、終句「しるけれ」と詠める、ただ香(かを)りのするのみならんや。女郎花の香ときき知れれば「しるけれ」と言へるなり。［ Ⅲ ］とはいたくかはりあることを知るべし。

問一　空欄［ a ］～［ c ］には同じ形容詞が入る。活用形を考慮して空欄を埋めよ。

a＝　　　　b＝　　　　c＝

問二　空欄［ Ⅰ ］～［ Ⅲ ］に入る適当な語を次から一回ずつ選べ。

ア　今の人　　イ　昔人　　ウ　俗人

Ⅰ＝　　　　Ⅱ＝　　　　Ⅲ＝

第五講　心情・理由説明

一

問1　次の文章は『更級日記』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身も※三倉の山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、※石山に参る。

注　三倉の山につみ余る…ここでは「倉に山となるほどの財力を蓄える」くらいの意。
　　石山…近江国にある石山寺。

問　傍線部「もどかしく」とあるが、なぜそのように感じるのか。その説明として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　子供を物詣に連れていっていないことを、申し訳なく思っているから。
イ　生活が豊かになったのに神仏をおろそかにしたことを、後悔しているから。
ウ　以前は神仏をかえりみなかったことを、恐ろしいことだと考えているから。
エ　物詣に行こうと思いつつなかなか行動にうつせないことを、反省しているから。
オ　親が物詣に連れていってくれなかったことを、ひどいことだと思っているから。

問２　次の文章は、石上の中納言が燕（つばめ）の子安貝を取ろうと計画したところ、家に使われている男たちが、「燕は建物の棟の柱の穴ごとに巣を作るので、そこに足場を高く組んで忠実な男に取らせたらよい」と進言し、中納言がその通りにした場面である。この文章を読んで、あとの問に答えよ。

殿より、使ひまなく賜はせて、「子安の貝取りたるか」と問はせたまふ。燕も、人のあまたのぼりゐたるに怖ぢて巣にものぼり来ず。かかる由の返りごとを申したれば、聞きたまひて、「いかがすべき」と<u>思しわづらふ</u>に、かの寮の官人くらつまろと申す翁申すやう、…

問　傍線部「思しわづらふ」とあるが、どのようなことを受けてのことか。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　燕の子安貝を取ろうとして、人を高い足場にのぼらせようとしたが、人々が高いところを怖がって子安貝が取れないという報告

イ　燕の子安貝を取ろうとして、燕を捕まえ腹を見てみたところ、子安貝らしきものはあったが見たとたん消えてしまったという報告

ウ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人を現場につかわしたのだが、それらの人たちがまったくやる気がないという報告

エ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人が足場にのぼっているのだが、それを燕が怖がって巣にあがってこないという報告

オ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人を足場にのぼらせたが、巣にいる燕が怖がって巣で子供を産まなくなったという報告

問３　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

つつしみて、虚言したまふまじきなり。〈中略〉ただし、例へば、狩人の鹿を追ひうしなひて、「これより鹿や行きつる」と問はんに、あの草の中にありとは知れども、「知らず」といはんは、虚言にあるべからず。仏、許したまふなり。すべてかやうなる虚言は、咎（とが）になるべからず。このほかの虚言は、よくよくつつしみたまふべし。

問　傍線部「虚言にあるべからず」とあるが、なぜそうだというのか。その理由として考えられる最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア　食料を得ようとしてなす行為は、人間が生きていくためにはどうしても必要な営みであるから。
イ　犯罪行為を目の前にして、自らを守るためどんなことを行っても、緊急避難として許されるから。
ウ　草の中に隠れた鹿を自分でも目視できない場合は、その所在を示さなくても虚偽とはならないから。
エ　殺生の罪をまぬがれるために嘘をつくことがあっても、それは方便として許容される所為であるから。
オ　正直に答えなくても、仏に祈りさえすればどんなことも許されるのが、仏教の有り難い利益であるから。

問４　次の文章を読んで後の設問に答えよ。

昔、（注1）空也（こうや）上人、（注2）山の中におはしけるが、常には、「あなもの騒がしや」とのたまひければ、あまたありける弟子たちも、慎みてぞ侍りける。度々（たびたび）かくありて、ある時、かき消（け）つやうに失せ給ひにけり。〈中略〉

かかるほどに、ある弟子、なすべきことありて、市（いち）に出（い）でて侍りければ、あやしの（注3）薦（こも）引き回したる中に、人ある気色（けしき）して、前にことやうなるものさし出だして、食ひ物の端々（はしばし）受け集めて置きたるありけり。「いかすぢの人ならむ」と、さすがゆかしくて、さし寄りて見たれば、行方なくなしてしわが師にておはしける。

「あなあさまし。『もの騒がしき』とのたまはせし上に、かきくらし給ひてし後は、ふつに世の中にまじらひていまそかるらむとは思はざりつるを」と言ひければ、「もとの住処（すみか）のもの騒がしかりしが、このほどはいみじくのどかにて、思ひしよりも心も澄みまさりてなむ侍るなる。…

1　空也…平安時代の僧。浄土教の先駆者。　2　山…比叡山延暦寺。　3　薦…むしろ。

問　傍線部について。弟子はなぜこのように言ったのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　空也上人が騒がしいことをいつも嫌っていたから。
イ　空也上人がはなはだ貧しい暮らしをしていたから。
ウ　空也上人が静かに仏道修行に打ち込んでいたから。
エ　空也上人が弟子に人々との交際を禁じていたから。
オ　空也上人がもっと遠くに行ったと思っていたから。

問５　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、かたい塩、肴(さかな)にして酒を飲ませて、少将には広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸しものといふものにして、ちやうわんにもりて、はしには梅の花のさかりなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて、かく書けり。

君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえてひき寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひてふしたり。少将起きて、小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり。

問　傍線部「小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　女が風流な歌人であることに気づき、御礼をしたくなったから。
イ　女の家が精一杯のもてなしをしてくれて、和歌にも心打たれたから。
ウ　女の家に何もなく、食事にも困って必要な物を取り寄せたから。
エ　女と共に生活するために、自分のこまごました品が必要だったから。
オ　宮中から迎えの人が来たので、参内の衣装などが必要だったから。

問6　次の文章は、はん噲（かい）と村雲という二人の盗人が道を行く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

（道中で出会った武士が）「（お前たちは）まことに悪徒（わるもの）とこそ見ゆれ。命は塵灰（ちりあくた）にあぶれあるく。乱れたる世にてあらば、豪傑の名とり、国を奪ひて、敵をおそれしめん。いさまし」と云ふ。はん噲云ふ。「ぬす人とても、命は惜しきぞ。財宝は得やすく、命はたもちがたし。百年の寿（いのち）を盗む術（すべ）しりたらば教へよ」とぞ。武士わらふわらふ。「財宝かすめられたらん者のうらみなからんやは。おほやけには、しかる者とらへんとて備へたり。人をも殺し、盗（ぬすみ）あまたして、むくひの命百年と云ふ事あるべからず。…

問　傍線部「武士わらふわらふ」とあるが、武士はなぜ笑ったと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　乱世ならば英雄になりそうな男だから、考えることも並一通りではないと感心したから。
イ　乱世と違い、今は世の中の治安が良くなっているということに男が気づいていないから。
ウ　命になど執着しない悪人中の悪人と思った男が、命は惜しいと凡人のようなことを言ったから。
エ　悪事を働くなら死ぬ覚悟ができているはずなのに、男は捕らえられることを恐れているから。

二

問1　次の文章は、保元の乱に敗れて逃れていた新院（崇徳院）を、家弘・光弘父子が輿に乗せて都でかくまってくれるところを探すが、ことごとく断られた後の場面である。文章を読んで、後の問に答えよ。

家弘父子も、かきも習はざる御輿を、てづからみづからかきたてまつり、ここへかしこへとつかまつりぬれば、力弱りはてて、はたらくべしともおぼえず。合戦には戦ひつかれたり、物の具にはおされたり。身のありさま、我にもあらずおぼえければ、「自害をせばや」と思ふこと度々なりけれども、「さて、院の御ことをば誰かは見とどけまゐらすべき」と思ひければ、よろぼひよろぼひつかまつる。院も合戦の紛れなれば、供御もまゐらずして、昨日も暮れぬ、今夜も明けなむとす。御身も弱らせたまひて、消えいる御ここちのみぞおぼしめされける。

家弘父子…家弘・光弘。桓武平氏。新院に近侍した。

問　傍線部「自害をせばや」とあるが、それを思いとどまった理由は何か答えよ。

問2　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

　これも今は昔、白河院の御時、北面のざうしに、うるせき女ありけり。名をば六（ろく）とぞいひける。殿上人ども、もてなし興じけるに、雨うちそほ降りて、つれづれなりける日、ある人、「六よびて、つれづれなぐさめん。」とて、使をやりて、「六よびて来（こ）。」といひけるに、程もなく、「六召して参りて候ふ。」といひければ、…

問　傍線部「六よびて来（こ）」とあるが、「六」はなぜ呼ばれたのか答えよ。

問３　次の文章は、『源氏物語』紅葉賀巻の一節である。源典侍は、年配の内侍で、恋多き女性である。その相手としては、頭中将、源氏の君、以前より関係があったと思われている修理大夫（すりのかみ）などがいる。この場面は、源氏の君が源典侍のところに忍んでいることを、頭中将が知ったことからはじまる。これを読んで、問に答えよ。

頭中将は、この君の、いたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふ（注１）がねたきを、つれなくて、うちうち忍びたまふ方々多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地いとうれし。かかるをりに、すこしおどしきこえて、御心まどはして、「懲りぬや」と言はむと思ひて、たゆめ（注２）きこゆ。

注１　もどく…非難する。
注２　たゆむ…油断させる。

問　傍線部「これを見つけたる心地いとうれし」とあるが、なぜ頭中将はこのような気持ちになったのか、説明せよ。

問4　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

※良峰（よしみね）の宗貞（むねさだ）といふ、六位の蔵人（くらうど）なるが、才学ある者にて、帝のみ心にかなひ、ちかう召しまつはさせ、時々「文（ふみ）よめ」「歌よめ」と、御あはれみかうぶりしかば、いつとなく朝まつり事もみそかに問ひきき給へるとぞ。宗貞さかしくて、まつり事はかたはしばかりも御答へ申さず。ただ、御遊びにつきし事どもを、「しかせしためし」など、み心をとりて申す。

色このむ男にて、花々しき事をなむ好みけるが、年毎（ごと）の※豊（とよ）の明（あ）かりの舞姫の数を、すすめてくはへさせし。「これは、※清見原の天皇の、吉野（よしの）に世を避けたまひしが、み国しらすべきさがにて、天女五人天（あま）くだりて、舞妓（ぶぎ）を、なぐさめ奉りしためしなれば、五人のをとめこそ古き例（ためし）なれ」と申す。同じく色このませしかば、ことしの冬を初めに、宣旨（せんじ）くだりて、花さかせ給へりけり。

良峰の宗貞…八一六～八九〇年。良峰安世（よしみねのやすよ）の子。桓武天皇の孫にあたる。八五〇年に仁明天皇が崩御すると出家して遍昭（へんじょう）と称する。

豊の明かり…豊の明かりの節会（せちえ）。新嘗会または大嘗会に豊楽殿（ぶらくでん）で行う公式の宴会。宴会の後、五節（ごせち）の舞が行われた。平安時代中期までは、五節の舞の舞姫は、公卿の未婚の娘の中から二人、殿上人・国司の未婚の娘の中から二人（大嘗会では三人）が選ばれた。

清見原の天皇…天武天皇（在位六七三～六八六年）。飛鳥浄御原宮（あすかのきよみはらのみや）（現在の奈良県明日香村）を造営した。

問　傍線部について、どのような理由でそうしたのか。問題文に即して説明しなさい。

問5　次の文章は『保元物語』の一節である。保元の乱の戦いで、源氏・平氏はそれぞれ親子や親族間で敵味方（崇徳（すとく）上皇方（がた）と後白河天皇方）に分かれて戦ったが、源為義（ためよし）は、敵対する長男の義朝（よしとも）や平清盛らに敗れ、比叡山（ひえいざん）に逃れて出家し、身を隠していた。そこに為義に従って戦った六人の子供たち（八男の為朝（ためとも）ほか、四・五・六・七・九男）が訪ねてきた。為朝は為義に関東に逃げるよう説得したが、為義は「降参して義朝に助命を乞い、息子たちの助命を頼む」と言い、それぞれに逃げるように伝えた後の場面である。よく読んで、後の問に答えよ。

入道、泣く泣く宣（のたま）ひけるは、「今度の合戦の大将軍を承りしも、我が身は老の末なれば、たとひ思ひ出でありとても、何（いか）ばかりの栄花（えいぐわ）をか期（ご）すべき。ただ、子供の行く末を思ひつる故なり。また、只今（ただいま）、首を延べ、恥を捨て、出でんとするも誰故ぞ。※和殿原（わとのばら）がためぞとよ。されば、いかならむ谷の底、岩木の陰にも身を隠し置きて、入道がならむ様（やう）をこそ聞き終（は）て給はめ。相（あひ）かまへて、一所（いつしよ）へばし落つるなよ。一人二人いかなる事に遇（あ）ふとも、残り留（とど）まる者、などか本意を遂げざらん。この中に、九郎は、未（いま）だ十五か六かにこそなると思ゆれば、弓の本末（もとすゑ）をも知らず、まして、武略の道、前後不覚の者なれば、八郎、これをば相具（あひぐ）して、且（かつう）は我が形見とも見よ、且は子とも思ふべし。されば、はや疾（と）う疾う」と暇（いとま）を乞ひけるが、また涙にむせびて…

注　和殿原…貴殿ら。お前たち。

問　傍線部について、なぜ入道は子供たちにこのように言ったのか、わかりやすく説明せよ。

第六講　内容説明

一

問1　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

近頃、和歌の道、ことにもてなされしかば、内裏、仙洞、摂政家、いづれもとりどりに、そこをきはめさせ給へり。臣下あまた聞こえし中に、治部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、…

注　内裏、仙洞、摂政家…順徳天皇を中心とする内裏歌壇、後鳥羽院を中心とする仙洞歌壇、藤原道家を中心とする摂政九条家歌壇のこと。

問　傍線部「いづれもとりどりに、そこをきはめさせ給へり」とはどのような状況を表しているか。次の中から最もふさわしいものを選べ。

ア　身分の高い人から低い人まで、皆が和歌に熱中していた。
イ　都だけでなく地方でも、皆が和歌を楽しんでいた。
ウ　皇族も貴族も、様々な歌を詠まなくてはならなかった。
エ　それぞれの流派が対抗し、和歌のできばえを競っていた。
オ　皇族も貴族も、皆が和歌をきわめ、盛んに詠んでいた。

問２　次の文章は、幕臣磯野政武（いそのまさたけ）の江戸の別荘（松楓亭（しょうふうてい））に政武と同門の歌人たちが集まった日の午後の出来事を、参加者の一人近藤保好（こんどうやすよし）が記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。　※本文中略有り。

時は未（ひつじ）の半（なか）ばにやなりぬらむ。

保好

のどかなる日影に冬を忘れ花時も小春の名にや咲くらむ

「さらば紅葉のもとに、酌（く）み残せし竹の葉の露の名残をこの花の陰にも」と、また盃（さかづき）の数を重ねたれば、いたく酔（ゑ）ひに酔ひぬ。我は酔ひのあまりに眠（ねぶ）りをもよほし、夢の枕も、ありし所のかはるとはなくて、露結ぶ山吹はえもいはぬ色に咲きて、夕ばへの盛りを見せ、梢（こずゑ）の藤の紫に、暮れゆく春の名残をとどめ、小田の蛙（かはづ）の折知り顔に声たつるなど、すべていひもてゆかむに、くだくだしかるべきほどの弥生の暮（くれ）の夕げしきなり。あはれ、かかる折にこそは花鳥の色にも音にも情け知るばかりの言の葉もがなと、せばき袖をかきあはせ、杉の柱に寄りゐて、<u>いといたう案じほれたる</u>に、そこことなき鐘の響きて酔ひの眠りをおどろかすめり。

問　傍線部「いといたう案じほれたる」とあるが、その説明として最も適当なものを一つ選べ。

ア　筆者は遅れてやって来たことを後悔して、どうしたらよいか考えている。
イ　筆者は酒に酔って、思案しようとしても何も考えられないでいる。
ウ　筆者は杉の柱にもたれかかって、立ち去った人々を心配している。
エ　筆者はすばらしい花の色や鳥の声を和歌に詠もうと苦心している。

問３　次の文章は、九条殿藤原師輔について述べたものである。読んで後の問に答えよ。

いにしへより今にかぎりもなくおはします殿の、ただ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心憂く口惜しきことにてはおはしますといへば、侍、されど、ことの例には、まづその御時をこそは引かるめれといへば、それは、いかでかはさらでは侍らん。そのみかどのいでおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。さらざらましかば、このごろわづかにわれらも［A］諸大夫ばかりになり出でて、所々の御前、雑役につられ歩きなましとこそ、入道殿は仰せられければ、源民部卿は、さる形したるまうちぎみだちのさぶらはましかば、いかに見苦しからましとぞ、笑ひ申させ給ふなる。〈中略〉

御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会（だいじょうえ）の御禊（ごけい）にこそ、いとうるはしくてわたらせたまひにしか。それは、人の目にあらはれて、九条殿なむ御うしろを抱きたてまつりて、御輿（みこし）のうちにさぶらはせたまひけるとぞ、人申しし。げに［B］うつつにてもいとただ人とは見えさせたまはざりしかば、ましておはしまさぬあとには、さやうに御まぼりにても添ひ申させ給ひつらん。

［C］さらば、元方卿、桓算供奉をぞ、逐（お）ひのけさせたまふべきな。…

（大鏡）

冷泉院…冷泉天皇。第六三代天皇。九五〇～一〇一一。在位は九六七～九六九。母は師輔女安子。
諸大夫…摂関・大臣家の家司（けいし）を務める四位五位を極位とする家柄の者。「まうちぎみ」も同意。
入道殿…藤原道長。九六六～一〇二八。父は師輔男兼家。
源民部卿…源俊賢。九六〇～一〇二七。母は師輔女。
大嘗会の御禊…天皇即位後初の新嘗祭に先立って行われる潔斎。
九条殿…藤原師輔。九〇九～九六〇。
元方卿…藤原元方。八八八～九五三。死後怨霊化したという。
桓算供奉…比叡山の僧。生没年未詳。死後怨霊化したという。

問一　傍線部Ａ「諸大夫ばかりになり出でて」とあるが、どのようなことをいうのか、次の中から最も適切なものを選べ。
ア　零落　　イ　出世　　ウ　繁忙　　エ　堕落

問二　傍線部Ｂ「うつつにても」とあるが、どういうことか。次の中から最も適切なものを選べ。
ア　夢心地の状態であっても。
イ　夢から覚めた正気の状態でも。
ウ　生前でも。
エ　物語に虚構されない現実においても。

問三　傍線部Ｃ「さらば」とあるが、どうであるならばというのか。次の中から最も適切なものを選べ。
ア　九条殿自身が実は強力な物の怪であるのならば。
イ　九条殿が物の怪を退治する能力があるのならば。
ウ　九条殿に物の怪を退治する能力がないのならば。
エ　九条殿に物の怪に憑(つ)かれた経験があるのならば。

二

問1　次の文章は、本居宣長の創作『手枕』の一節で、帝（内）が、春宮（故宮・前坊）を亡くした御息所を見舞うよう源氏の君に促すところから始まる。これを読んで、後の問に答えよ。

内にも、故宮の御事を忘れさせ給はず、あはれにおぼしめし出でつつ、折々の御とぶらひ、たえずぞありける。源氏の君にも、「前坊の御息所（みやすどころ）のあはれにながめ給ふらむを、折々はとぶらひものせよかし」など、のたまひつけしかば、げに心にくくよしある人と、さきざきも聞きおき給ひしあたりの事なれば、かつはゆかしくおぼされて、<u>ひと日、内裏（うち）よりまかで給ふとて、ゆふつけておはしけり。</u>

問　傍線部について、源氏の君が御息所を見舞おうと思い立ったのはどのような事情によるか、簡潔に説明しなさい。

問２　次の文章は、内大臣の通いが途絶えたことに悩む伏見の大君が、叔母から気晴らしにと宮中に誘われて参内したところ、帝に見初められ寵愛を受けた後に、帝の文（ふみ）を受け取る場面から始まっている。これを読んで、後の問に答えよ。

御消息ばかり、いとしげう、あはれにこまやかに書き尽くさせ給へるも、まことにかたじけなう思ひ知られつつ、…〈中略〉
常よりも、風さへ心細き夜、御袖の氷もいと溶けがたう、明かしかねさせ給ひて、まだ明け暗（ぐれ）のほどに、内裏（うち）より、
「片敷きの冴ゆる霜夜の衣手にかかる涙の色を見せばや
寂しき床（とこ）は変はらずと、Ⅰあらぬ思ひや立ち添ふらん」
とあるを、待ち見給ふ心地も、いとあはれにて、うち泣かれ給ひぬ。
「霜払ひ跡ふみ作る浜千鳥見ても Ⅱかなしき思ひならでは
何ごとをかは」
と、聞こえ給へるを、たぐひも知らず、かなしう思されて、いよいよ流し添へさせ給ひけり。

注　あらぬ思ひ…私ではない他の人への思い。
思ひならでは…思い以外には。
何ごとをかは…「何ごとをかは思はむ」を省略した形。

問　波線部Ⅰ「あらぬ思ひや立ち添ふらん」、Ⅱ「かなしき思ひならでは　何ごとをかは」は、問いかけとそれに対する答えになっている。誰のどのような問いかけに対して、誰がどのように答えたのか、内容を補って七十字以内で説明せよ。

問３　次の文は、実母に先立たれた姫君が継母に疎まれ、姉妹たちの世話をさせられるなど、つらい日々を送っていた頃の様子を述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

君ひとり臥（ふ）し、寝（い）も寝（ね）られぬままに、「母君、我を迎へたまへ」と、「わびし」と言ひつつ、…〈中略〉

つとめて、物語してのついでに、「*これがかく申すは、いかがし侍らむ。かくてのみは、いかがは、し果てさせたまはむ」と言ふに、いらへもせず。わづらひてゐたるほどに、「*三の君の*御手水（てうづ）参れ」とて召さるれば、立ちぬ。心のうちには、とありともかかりとも、よきことはありなむや、女親（めおや）のおはせぬに、幸ひなき身と知りて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿の内離るまじければ、ただ消え失せなむわざもがなと思ほす。

（『落窪物語』より）

注　これがかく申すは＝姫君に仕える侍女あこきの言葉。「これ」はあこきの恋人である帯刀（たちはき）のこと。「かく申す」は、帯刀の主人である少将が姫君と結婚したがっていることを、あこきに伝えたことを指す。
三の君＝継母の実の娘で、姫君の姉妹にあたる。
御手水参れ＝手を洗う水を差し上げなさい。

問　傍線部はどういうことを言っているのか、説明せよ。

第七講　内容合致

一　次の文章は、江戸時代の俳人松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の一節である。本文を読んで、後の問に答えよ。

とかくして越え行くままに、阿武隈川(あぶくまがは)を渡る。左に会津根(あひづね)高く、右に磐城(いはき)・相馬(そうま)・三春(みはる)の庄。常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。影沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川(すかがは)の駅に等躬(とうきゆう)といふ者を尋ねて、四五日とどめらる。まづ、「白河の関いかに越えつるや」と問ふ。「長途(ちようど)の苦しみ、身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懐旧に腸(はらわた)を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

　風流の初めや奥の田植歌

無下(むげ)に越えんもさすがに」と語れば、脇・第三と続けて、三巻となしぬ。

この宿の傍らに、大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧あり。橡(とち)ひろふ深山(みやま)もかくやとしづかに覚えられて、ものに書き付け侍る。その詞、

　栗といふ文字は西の木と書きて、西方浄土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用ゐ給ふとかや。

　世の人の見付けぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮(ひはだ)の宿(しゆく)を離れて、安積山(あさかやま)あり。道より近し。このあたり沼多し。かつみ刈る頃もやや近うなれば、「いづれの草を花かつみとは言ふぞ」と人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人に問ひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山の端にかかりぬ。二本松より右に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。

あくれば、しのぶもぢ摺(ずり)の石を尋ねて、信夫(しのぶ)の里に行く。遥か山陰の小里に石半ば土に埋れてあり。里の童(わらべ)の来たりて教へける。「昔はこの山の上に侍りしを、往来の人の麦草をあらしてこの石を試み侍るを憎みて、この谷に突き落とせば、石の面(おもて)下ざまに伏したり」と言ふ。さもあるべき事にや。

　早苗とる手もとや昔しのぶ摺

（『おくのほそ道』による）

注　庄…かつての荘園の名を残す地。
脇・第三…第二句・第三句。
椽ひろふ深山…芭蕉が思慕していた西行の歌「山深み岩にしただる水とめんかつがつ落つる椽拾ふほど」（『山家集』）による。「椽」は、とちのき科の落葉高木。
行基菩薩…奈良時代の僧。聖武天皇の帰依を受け、東大寺大仏の造営に尽力した。
檜皮の宿…現在の福島県郡山市日和田町。
かつみ…あやめの一種。
黒塚の岩屋…安達が原の鬼女が住んでいたという岩屋。
しのぶもぢ摺の石…奥州信夫郡に産する、乱れた模様を布に摺りつけるために用いられた石。

問　本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選べ。

ア　花かつみを探し歩いたが、見付けることはできなかった。
イ　等躬に対して、白河の関では風景に感動しなかったと答えた。
ウ　村の子どもたちが、石の半分が土に埋もれている理由を語ってくれた。
エ　世俗を逃れて隠棲（いんせい）する僧からは、西行の暮らしぶりが思い浮かべられた。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

同じ御時、小川滝口定継といふ御気色よきぬし侍りけり。四﨟座にて、上﨟を越して久しく奉公して候ひけり。名月の夜、主上南殿に出御ありて、御遊ありけるに、かの定継が下人、黒戸のかたの御廐（うまや）の辺りに、いねぶりして候ひけるが、にはかに走り立ちて、中将実忠朝臣の綾小路の家へ、さかいきになりて走り向かひていふやう、「ただいま内裏へ、きと参らせたまへ。なほなほ、きときと」といひけり。

中将、さしもの急事、何ごとにかとあやしう思ひて、「たが奉行ぞ」と尋ねられければ、「小川滝口殿のうけたまはらせたまひて候ふ」といひて、やがて走りかへりけるほどに、中将あわてさわぎて、はせ参りてうかがひければ、ただいま南殿にわたらせたまふよし、女房申せば、御後のかたにておとなふに、「たそ」と御尋ねあれば、実忠朝臣めされ候ひつるほどに参りたるよし申しければ、おほかたさることなければ、ふしぎにおぼしめして、くはしく御尋ねありければ、使ひのいひつるごとく、定継がうけたまはるとて、やがてその下人にて候ふよし申しければ、定継うけたまはりて相尋ぬるに、はやくかの下人ねぼけてかくめしたりけるなり。

あまりに走りけるほどに、二条油小路を南へかいおりける時、築地の角に走りあたりて、顔さき突き欠きてありけり。そのよしを申し上げければ、比興のさたにてやみにけり。

定継が申しけるは、「これは勝事にて候ふ。ねぼけ候はんからに、さることやはつかうまつるべき。まさかさまのくせごとをもぞ引き出だし候ふ」とて、この下人をやがてつかはずなりにけり。

（橘成季『古今著聞集』）

注　同じ御時…順徳天皇の在位のとき。　滝口…警備の武士。
四﨟座…第四番目の地位。　黒戸…清涼殿の北、滝口の詰所近くの部屋。
さかいきになりて…息せききって。

問　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

ア　実忠は、前もって定継に対し、南殿に参上するように命じていた。

イ　下人は内裏から実忠の家に走って行ったが、用向きを伝えると気がすんだのか、ゆっくり歩いて、もと来た道を帰って行った。

ウ　下人は、けがをしてしまうほど急いで走った。

エ　筆者は、下人の失敗の責任が定継にあると考えている。

オ　帝は下人の一件をあえてとがめることはしなかった。

カ　定継は下人をその後も重用した。

三　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

かかる程に、冬になりぬれば、いとつれづれに世の中のうらめしきことのみ思へば苦しきを、行ひは許されず、「心慰めに、東(あづま)の方へまからむ」と、親に申しければ、「なほ、この正月の司召(つかさめし)に過ぐせ。それにともかくもあらずは、唐土(もろこし)へもいませよ」とのたまふに、さはりて待ちけるに、その司召にむなしうなりぬれば、思ひ憂(う)んじはてて、さ言はでえあるまじき人のもとに言ひやる。

　浮き草の身は根を絶えてながれなむ涙の川のゆきのまにまに

とあるを見て、さりともふとはえ行き離れじと思ひて、返し、

　遅れゐて嘆かむよりは涙川われおり立たむまづながるべく

かくて、まことにこの男ものへいなむと思ひたる気色を見て、親、明け暮れ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかにいなむと言ふは、親をいとふか。なほ、この正月の司召をだに待て」と、せちにのたまふ。思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く世の中憂きことと思ひ憂んじはてて、帝(みかど)の御母后(ははきさき)のおもと人、この知れる人のなかに言ひやる。

　なりはてむ身をまつ山のほととぎすいまはかぎりと鳴き隠れなむ

とありけるを、おもと人らあはれがりて、「かくなむ申したる」と啓しければ、父はたその后の甥(おひ)にて、「罪咎(とが)もなきに、かくてさぶらはせたまへば、人の国にも隠れ、山林(やまはやし)にも入りぬべし」と、せちに奏したまへば、「宮仕へせず、空めきたりとて、懲らさむとて、とたるぞ。いまは懲りぬらむ」とて、その司召の直物(なほしもの)に、もとの官(つかさ)よりはいま少し勝りたるをぞたまひける。

（『平中物語』による）

注　かかる程…主人公平中（平貞文）が天皇に官職を取り上げられ朝廷に出仕していない頃。
司召…中央官を任命する儀式。古くは正月に行われた。
帝…宇多天皇。
おもと人…貴人に仕える召使い。
この知れる人のなかに…この男の知っている人のところに。
父…平中の父、平好風。
とたる…「とりたる」の促音便化「とったる」の促音無表記形。
直物…官位任命の追加訂正をすること。

問　次の文ア～オのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBで答えよ。

ア　「遅れゐて」の歌には、一人後に残されるより自分が先に死んでしまいたいという、強い情愛がこめられている。
イ　「親をいとふか」という表現には、もうどうにでもなれという、老いた親の諦めの心情がこめられている。
ウ　「なりはてむ」の歌が詠まれたのは、この歌が詠まれた年の司召から三、四ヵ月経過した後である。
エ　平中が官職に就けなかったのは、裏で天皇の深慮がはたらいていたからであった。
オ　時の天皇の母は、平中の父のおばである。

第八講　古文常識問題

一

問1　「寅の刻」が示す時間として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　午前零時頃　　イ　午前二時頃　　ウ　午前四時頃
エ　午前六時頃　　オ　午前八時頃

問2　「丑寅より未申まで」を現代語に訳せ。

問3　「つごもり」の意味として正しいものを次の中から選べ。

ア　昨晩　　イ　早朝　　ウ　月の初め　　エ　月末

二

問1　「長月」は陰暦の何月のことか。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　七月　　イ　八月　　ウ　九月　　エ　十月　　オ　十一月

問2　「みな月」は旧暦の何月のことか。正しいものを次の中から選べ。

ア　三月　　イ　六月　　ウ　七月　　エ　九月　　オ　十月

問3　次の文章は『笈の小文』の一節である。読んで、後の問に答えよ。

神無月の初め、空定めなき気色、身は風葉（ふうえふ）の行末（ゆくすゑ）なき心地して、

旅人とわが名よばれん初しぐれ

　　また山茶花を宿々にして

岩城の住、長太郎といふ者、この脇を付けて、其角亭において関送りせんともてなす。

　時は［Ⅰ］吉野を籠めん旅のつと

この句は、露沾（ろせん）公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初めとして、旧友・親疎・門人等、あるは詩歌文章をもて訪（とぶら）ひ、あるは草鞋（わらぢ）の料（れう）を包みて志をあらはす。

露沾公……陸奥国磐城平藩主内藤義泰の子、義英。俳人。

問　空欄［Ⅰ］に入る最も適切な語を次の中から選べ。

ア　春　　イ　夏　　ウ　秋　　エ　冬

三

問1　「九月九日」の節供を何というか。正しいものを次の中から選べ。

ア　七夕　　イ　端午　　ウ　上巳
エ　人日　　オ　重陽

問2　「時雨」と同じ時期の景物として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　ほととぎす　　イ　紅葉
ウ　藤　　エ　うぐひす

問3　「さそふ水あらばあらばと蛍かな」の句の季語は「蛍」であるが、その季節は何か。最適なものを次の中から選べ。

ア　春　　イ　夏　　ウ　秋
エ　冬　　オ　新年

問４　次の文章は、江戸時代の俳人松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の一節である。本文を読んで、後の問に答えよ。

とかくして越え行くままに、阿武隈川（あぶくまがは）を渡る。〈中略〉まづ、「白河の関いかに越えつるや」と問ふ。「長途（ちょうど）の苦しみ、身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懐旧に腸（はらわた）を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流の初めや奥の田植歌

無下（むげ）に越えんもさすがに」と語れば、〈中略〉…

栗といふ文字は西の木と書きて、西方浄土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用ゐ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

〈中略〉

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

問　傍線部はどの季節をよんだ句か。正しい季節を次の中から選べ。

ア　春　　イ　夏　　ウ　秋　　エ　冬

四

問1　「素盞嗚（すさのを）の三十文字（みそもじ）余り一文字（ひともじ）」について、次の問に答えよ。

（一）「三十文字余り一文字」とは何を指しているか答えよ。

（二）『古今和歌集』「仮名序」が引用する、「素盞嗚尊（みこと）」の詠歌を次に挙げている。そのうちの空欄［　］に入るべき語を後の中から選べ。

八雲立つ［　］八重垣妻籠めに八重垣つくるその八重垣を

ア　吾妻　　イ　出雲　　ウ　白波
エ　八重　　オ　八雲　　カ　我家

問2　次の空欄［A］、［B］のそれぞれに入るべき表現を、『古今和歌集』「仮名序」の後に挙げる部分から選び、記せ。（順不同）

［A］の心をもなだめ、［B］の心にもあはれと思ふは此の歌なりと、古今の序に侍るも、げにとおぼえて、…

『古今和歌集』「仮名序」

やまとうたは、人の心を種として、よろづのことのはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

五

問1　「そのあたりに築地[Ⅰ]など崩れたるが、さすがに蔀[Ⅱ]など上げて、簾掛け渡してある人の家あり。」の傍線部Ⅰ、Ⅱの語の読みを歴史的仮名遣いで記したものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選べ。

Ⅰ　ア　しばがき　　イ　すいがい　　ウ　ついぢ
　　エ　つちかべ　　オ　まがき

Ⅱ　ア　かうし　　イ　きちやう　　ウ　しとみ
　　エ　つまど　　オ　とばり

問2　次の傍線部A・Bの漢字の読みを平仮名の現代仮名遣いで記せ。

帝(みかど)、小蔀[A]より御覧じて、…

御簾[B]の外(と)にも出で給はず、…

A＝　　　　B＝

問3 「格子」の読みを、現代仮名遣いで答えよ。

問4 「この天暦（てんりやく）の御時に、[I]の御前の梅の木の枯れたりしかば、…」について、次のそれぞれの問に答えよ。

（一） 傍線部「天暦の御時」とはどの天皇の時代か。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　醍醐（だいご）天皇　　イ　一条天皇　　ウ　村上天皇

エ　堀河天皇　　オ　鳥羽（とば）天皇

（二） 空白部[I]に入る常の天皇の居所を表す語を、次の中から選べ。

ア　弘徽殿（こきでん）　　イ　登華殿（とうかでん）　　ウ　仁寿殿（じじゅうでん）　　エ　後涼殿（こうりょうでん）　　オ　清涼殿（せいりょうでん）

六

問1　次の文章は『更級日記』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

霜月の二十余日、※石山に参る。雪うち降りつつ、道のほどをさへをかしきに、［X］の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

［X］の関のせき風ふく声はむかし聞きしにかはらざりけり

〈中略〉三日（石山に）さぶらひてまかでぬ。

そのかへる年の十月二十五日、※大嘗会の※御禊とののしるに、…

注　石山…近江国にある石山寺。
　　大嘗会…天皇が即位して最初に行う新嘗祭。
　　御禊…大嘗会に先立って行われる禊（みそぎ）。

問　空欄［X］に入る地名として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　逢坂　　イ　山城　　ウ　信楽
エ　枚方　　オ　米原

問２　「震旦」とは、現在のどこの国を指すか。漢字二文字で記せ。

問３　「常州」「濃州」の現在の県名をそれぞれ漢字で答えよ。

常州＝　　　　濃州＝

テキスト解答解説

【第一講】

〔模範解答〕

一
問1 イ　問2 イ　問3 オ　問4 エ　問5 ア
問6 ア　問7 ア　問8 オ　問9 オ　問10 ウ

二
問1 ウ　問2 オ　問3 愚か者　問4 イ

三
問1 エ　問2 イ　問3 イ　問4 ア　問5 エ

四
ア

五
問1 エ　問2 エ　問3 片敷き

【第二講】

〔模範解答〕

一

問1 イ　問2 ア　問3 エ　問4 ウ　問5 イ

問6 早く退出してしまえ

二

問1 ウ　問2 ア　問3 エ　問4 ア

問5 あなたはいらっしゃいますな。私が一人で参ります

三

問1 イ　問2 ア　問3 オ

四

問1 (a) かねてからお思いになっていた

(b) 涙を流しなさる

問2 (A) 仰ぎ見た月が隠れるように、お慕いしていた後宇多法皇が亡くなった秋なので、悲しみのあまり心が曇るという道理を知れと曇る空であるなあ

(B) 後宇多法皇が亡くなり、光がない世の中では曇るのが道理である秋の月が、人々の悲しみの涙も加わり、よりいっそう曇っているのだろうか

〈現代語訳〉

二

問1　「さて誰をお供させようか」と言うと、「いや、すでに心の準備はしていた」と言って、菅の笠、竹の杖、その他、旅の道具類などを見せると、家の者は皆（、その決意に）心を動かされて、吉日を選んで出立させた。

問2　季札は、帰ってきて、（徐君が）欲しがった太刀を与えるために、徐君を尋ねたところ、（ある人が）「すでに死んでしまった」と言ったので、徐君の墓を訪れて、欲しがっていた太刀を（お墓に）かけました。

問3　少将の内侍が、台盤所の前庭の楓の木を部屋の中から見て、「この楓に、初めて紅葉していた葉がなくなったよ」と言ったのを、頭中将が聞いて、「どちらの方角に初紅葉があったのでしょうか」と言って、梢を見上げたので、人々もみんな目を向けて見たが、蔵人永継がすぐに、「西の枝でございましたでしょう」と申し上げたので、…

問4　二人（＝はん噲（かい）と村雲）が言う。「この米を、高値で買おう。売れ」と言って、金一枚を投げ出す。〈中略〉武士が言う。「米の値段がわずかなのに、金一両出されたのは、富貴の人が旅をしているのでもない（ように見受けられる）。勇んで博打をして、あるいは盗みをして暴れ回っているのか」と尋ねる。村雲が答える。「盗人である。昨夜幸運を得て、たくさんの金がわらで編んだ物を包むものの中にある。（あまりに）多いのも煩わしくて、どうにかして使いきってしまうつもりだ」と言う。

問5　夫に言ったことには、「津の国というところが、たいそう美しいらしいので、なんとかして難波にお祓いをしがてら参ります」と言ったところ、「とても良いこと。私も一緒に」と言ったので、「あなたはいらっしゃいますな。私が一人で参ります」と言って、出かけて行った。

三

問1　このように明かし暮らしている間に、九月になった。中納言が、北の方におっしゃることには、「将来はわからないが、二人の娘は結婚した。この対の君を、今年の五節に宮中へ参内させたいと思うのだ。（あなたが私と）同じお気持ちでないことが、つらいことよ」とおっしゃるので、…

問２　女が、

人のあきに…＝人に飽きられたので、秋になって庭までも荒れて、道もなく蓬が茂っている家だと見てわからないのか、いや、わかるはずだ

と書いて出してきたけど、何か書ける道具がまったくなかったので、ただ口頭で、男が、

誰があきに…＝誰に飽きられて荒れた家なのだろう。私だけでも庭の草は生えさせないだろう〔＝足繁くここに通う〕

問３　この帝〔＝後三条天皇〕が、天下を治めなさって後、世の中はみな治まって、現在に至るまでその影響が残っているのでした。〈中略〉（後三条天皇が）皇太子でいらっしゃった時、皇太子に敵対する勢力が多くいらっしゃったので、（東宮の位にあり続けることを）危うくお思いになっていたところ、検非違使庁の長官の源経成といった人が、直衣に柏ばさみの格好で、白羽の胡籙を背負って参上して、中門の廊下に座っていた日は、どのようなことが起こったのか、と宮中の中が、女房たちをはじめとして、身を隠して大騒ぎしたとかいうことだ。〈中略〉重罪を犯した者が、（東宮が）いらっしゃる近くに逃げこもっていたので、包囲したのだが、もしかして東宮御所に逃げ込むことがあるかもしれないと、参上したのであった。このように（東宮は何かある度に）危うくお思いになって、東宮の位も見捨てられてしまうのではないだろうか、とお思いになったが、殿上人で平行親と申し上げた人が、占いを上手にするという評判があって、まさに天下を治めなさるに違いないということを、（東宮に）申し上げた甲斐があって、このように（後三条天皇は）並ぶものがいない（素晴らしい天皇な）のでいらっしゃった。

四　その後（後宇多法皇の）御孫の東宮〔＝邦良親王〕のお出ましがある。世をお治めになる時の御心がけなど、もう少し細やかに申し上げ知らせなさる。東宮は、先帝〔＝後二条天皇〕の御代わりにも、なんとかして心の限りお仕え申し上げようと、かねてからお思いになっていたので、もの足りず残念で、たいそう涙を流しなさる。

〈中略〉

（後宇多法皇は）心細く悲しいとばかりお思いになるが、正中元年六月二十五日、とうとう崩御された。御年五十八歳になりなさっていた。後宇多院と申し上げるのであろう。

〈中略〉

御四十九日は八月十日あまりの頃なので、世の中の様子がなんとなくしみじみとした感じが多いので、女院や、宮たちの御心の中は、（悲しみで）朝霧よりも晴れ間がない。十五夜の月まで曇っているので、故院の治世の御世に、宰相典侍といってお仕えした人は、雅有の宰相の娘である。その御世の古い友であるので、同じ気持ちだろうと想像しなさるのも慕わしくて、（宰相典侍は）万秋門院に手紙を送りなさる。

仰ぎ見し…＝仰ぎ見た月が隠れるように、お慕いしていた後宇多法皇が亡くなった秋なので、悲しみのあまり心が曇ると
　いう道理を知れと曇る空であるなあ

たいそうしみじみと悲しいと拝見して、お返事を、宰相典侍が

光なき…＝後宇多法皇が亡くなり、光がない世の中では曇るのが道理である秋の月が、人々の悲しみの涙も加わり、より
　いっそう曇っているのだろうか

【第三講】

〔模範解答〕

一

問１　エ　問２　ウ　問３　オ　問４　イ　問５　ウ

二

問１　ア　問２　ア　問３　Ａ　エ　Ｂ　ア

問４　都　問５　狂句

三

問１　平重盛の子供たちが誰一人姿を見せないのは当然だろう

問２　『延喜式』に載る吉野山口神社というほど由緒ある神社にも見えない

問３　自分の髪の毛を切って市場に持って行き、酒と交換した

問４　警固の役人が門を開けて出ていくときを私がひそかに待っていると

問５　Ａ　雪の上にいて、寒くて冷たいこと

Ｂ　子供が足を怪我して、倒れ伏して泣きながら訴える姿

〔現代語訳〕

一

問1　後堀川院が天皇の位にいらっしゃった時、嘉禄二年九月十一日、毎年この日に朝廷から伊勢神宮に幣を奉納する例幣として頭中将宣経朝臣以下、蔵人たちが参上して天皇のお出ましを待っている時、人々が、清涼殿の西廂の南端にある部屋に集まって座って、何ということもなく雑談をしていた時に、女房たちの詰所の台盤所には内侍所に務めている女房たちや、そうではない〔＝内侍ではない〕女房たちもお控えしていた。建物をつなぐ廊下には、宣経に従っている蔵人たちが並んで座っていて、（簾の）内も外も関係なく、いろいろな雑談を言い交わしていると…

問2　歌川はもともと越前の国三国の遊郭、荒町屋の某のもとの遊女で、（遊女名を）泊瀬川という。容貌がよく、気立ても素晴らしく、お香、お茶、お花、習字をひと通り嗜んだが、最も生来、俳諧を好んだ。後に、出家して歌川と名乗る。まだ（遊女として）栄えていた時、江戸の某の士夫が、三国に来て特に懇意になった。その時、泊瀬川が言うには、「私は、東国を一度みたいと長く願い、もし機会があり遊山することになったら、あなたの屋敷に泊めてくださるだろうか」と言うと、快く承諾した。その後、東国の人とさえ聞けば、必ずこのこと〔＝もし自分が東国へ行くことがあれば、家に泊めて欲しいということ〕を約束しておいた。

問3　ある時、主人の前に出て、「このたびはご主人さまのおかげで、あちこち残ることなく見物し、長年の願いも叶え、さらに、思いもよらないお人からもお恵みを頂戴しました。国で約束した日数も、今は迫っているので、お暇をお与えください」と言うと、主人が「そのことは少しも心にかけなくてよい。別に人を使って国の人に（いろいろと）言わせない（ようにしよう）」と言って、一心に留めなさるので、…

問4　（後三条天皇が）皇太子でいらっしゃった時、皇太子に敵対する勢力が多くいらっしゃったので、（東宮の位にあり続けることを）危うくお思いになっていたところ、検非違使庁の長官の源経成といった人が、直衣に柏ばさみの格好で、白羽の胡籙を背負って参上して、中門の廊下に座っていた日は、どのようなことが起こったのか、と宮中の中が、女房たちをはじめとして、身を隠して大騒ぎしたとかいうことだ。（東宮が）いらっしゃる所は、二条東洞院であったので、そのあたりを軍勢が包囲したので、「このような〔＝検非違使の役人が東宮の御所を包囲している〕ことがございます」など申

し上げあっていた時に、長官が参上したので、東宮も御直衣をお召しなどして、御用意なさったときに、長官が、検非違使庁の一役人を呼びつけて、「犯人は召し取ったか」と尋ねなさったところ、「既に召し取りました」と言ったので、あれこれを申し上げずに退出なさった。

問５　「昔から今に至るまで素晴らしくいらっしゃる殿〔＝九条殿藤原師輔〕が、ただ（師輔の孫である）冷泉院の（気の病の）ご様子だけが、たいそう情けなく残念なことでいらっしゃる」と（大宅世継が）言うので、侍が、「しかし、何かの例としては、まずその冷泉院の御代を引かれるようだ」と言うと、（世継は）「それは、どうしてそうならないことがありましょう。その帝〔＝冷泉院〕が即位なさったから、この藤原氏の一門が、今に栄えていらっしゃる。『そうでなかったら〔＝冷泉天皇が即位なさらなかったら〕、このごろやっとのことで自分たちもあちらこちらの御前駆、雑役として連れられ歩いていただろう』と、藤原道長がおっしゃったので、…

二

問１　このように明かし暮らしている間に、九月になった。中納言が、北の方におっしゃることには、「将来はわからないが、二人の娘は結婚した。この対の君を、今年の五節に宮中へ参内させたいと思うのだ。（あなたが私と）同じお気持ちでないことが、つらいことよ」とおっしゃるので、継母が、我が子たちに（対するよりも、中納言が対の君に対して）思いが強くいらっしゃるのを、腹立たしいと思いながら申し上げるには、「かえって寵愛が少ない宮仕えよりも、時勢に乗っている上達部などと結婚させなさいませよ」とおっしゃると、中納言が、「平凡な人には、結婚させることはすまいと思って」などとおっしゃるので、〈中略〉継母は一緒に準備をする様子で、内心では、「なんとかして見苦しい評判を立てて、愛想を尽かさせよう」と思いなさった。

中納言が、十一月のことなので、このこと〔＝対の君の入内〕だけを準備なさるので、我が子にもまさっているようなことを（北の方は）ねたみ、「（対の君を）笑われ者にしよう」と思い、…

問２　昔、空也上人が、比叡山延暦寺にいらっしゃったが、いつも、「ああ騒がしいなあ」とおっしゃったので、たくさんいた弟子たちも、慎んでいました。たびたびこのようで、ある時、消えるようにいなくなりなさった。（弟子たちは空也上

人を）思いつく限りを探したが、まったく見つけ出せずに、数か月になった。そうばかりもしていられない〔＝空也上人を探し続けてもいられない〕ので、（弟子たちは）みな思い思いに散り散りになった。

問３ 上達部や、殿上人などに対面する人は、決まっているようなので、作者は、いるかいないかさえ知られるはずもないが、十月一日頃のたいそう暗い夜、不断経を、声がよい僧たちが読むときであるといって、そちらに近い戸口に二人くらい出て聞きながら、雑談をして寄りかかって横になっていると、参上した人〔＝殿上人〕がいるので、「逃げて中に入って、部屋にいる女房たちを呼び出しなどするようなのも見苦しい。どうにでもなれ、ただその場に応じて。このようにただ（このままいよう）」と言う同僚の女房がいるので、（作者は）そばで（同僚の女房と殿上人が話すのを）聞いて座っていると、（殿上人は）思慮がある静かな様子でものなどを言うのが、残念ではないようだ。

（殿上人が）「もう一人〔＝作者のこと〕は」などと尋ねて、世間の普通の男性にありそうな軽く言い寄るそぶりを見せて口説いてもこず、世の中のしみじみとしたことなどを心を込めて言って、そうはいってもやはり厳重に引っ込みがたいいろいろがあって、私も同僚の女房も答えなどするのを、…

問４ こうして、山々や寺々を伝い行く間に、四月のはじめくらいに美濃の国まで上ってきたが、そうはいってもやはり思い捨てながらも、都のことなどを知りたいと思われて、「そちら〔＝都〕の便りがあればなあ」と心待ちにしているちょうどその時、ほととぎすが、二声三声鳴いて過ぎたので、

ほととぎす…＝ほととぎすよ、都へ行くならば言づけたい。（山を）越えるのが（お前よりも）遅れた旅のしみじみした思いを。

問５ 人間の中にものがある。仮に名付けて風羅坊という。本当に薄い衣が風に破れやすいようなことをいうのであろうか。彼は、俳諧を長く好んだ。結局（俳諧を）生涯の仕事とする。ある時は飽きて投げ出そうということを思ったり、ある時は進んで人に勝つようなことを誇りにしたり、是非が心の中で闘って、このために身体が不安定である。一時は出世を願ったが、この（俳諧の）せいで支障があり、一時は学んで愚かさを悟るようなことも思ったが、これ〔＝俳諧〕のために破られて、とうとう無能無芸でただこの（俳諧）一筋につながる。

三

問１　（前内大臣の平宗盛が）「さて平維盛はどうした」と問いなさると、「平重盛の子供たちは誰一人お見えにならない」と申し上げる。「それ〔＝平重盛の子供たちが誰一人姿を見せないこと〕もそう〔＝当然〕であろう」と言って、いよいよ心細そうに思いなさった。

問２　そして、川沿いに少し西に行って、丹治という所から吉野山の入口にかかる。やや深く入って行って、杉群の中に、四手掛の明神と申し上げる神がいらっしゃるのは、「（『延喜式』に載る）吉野山口神社」などではないだろうか。だけど、そう〔＝『延喜式』に載る吉野山口神社〕いうほどの（由緒ある）神社にも見えない。

問３　五条あたりに、たいそう貧しくて住んでいた男女がいた。男はとても酒を好んだが、手に入れられるすべもなかったので、妻はひどく仕方がないと思って、自分の髪の毛半分くらいを切って市場に持って行き、酒に交換して男に勧めた。男は驚き、どのようにして求めなさったのかと尋ねると、このようにした〔＝自分の髪の毛を切って市場に持って行き、酒と交換した〕と語ったので、男はしきりに泣いて、…

問４　今すぐにでも出奔してしまいたい気持ちがして、そっと部屋の隅の戸を開けたところ、〈中略〉人に見つけられるだろうかとどこか恐ろしいので、もとのように入って横になったけれど、傍にいる同僚の女房は身体を動かすことさえもしない。以前も警固の役人が深夜に門を開けて出ていく習慣であったので、その時を（私が）ひそかに待っていると、今夜は早く開けて出て行った音がするので（私は出奔した）。

問５　頃は二月十日の明け方なので、立春後の寒さは、以前として尽きず、音羽川の流れも凍って、嶺の嵐もとてもはげしい。道の氷も解けない上に、さらに曇って雪が降るので、行くべき方向も見えなかった。子供が、しばらくは母に促されて歩くけど、しまいには足が腫れて血が出て、ある時は倒れ伏して、ある時は雪の上に座って、「寒いよ冷たいよ、これ〔＝雪の上にいて、寒くて冷たいこと〕はどうしよう」と泣いて悲しむ。母が一人で、これ〔＝子供が足を怪我して、倒れ伏して泣きながら訴える姿〕を見たとかいう心の中は、何とも言いようがない。

【第四講】

〈解答〉

問1　X イ　Y ウ　問2 ア　問3 浄　問4 エ
問5　問一 A ぞ　B こそ　問二 C 梅　D 柳
問6　問一 ア　問二 ましか
問7　エ　問8 エ
問9　問一 a よく　b よけれ　c よし
　　問二 Ⅰ ウ　Ⅱ イ　Ⅲ ア

〈現代語訳〉

問1　薬玉に取り換えて捨てるようだ。
　ああ、この西瓜が赤くあってくれよと思うことが、当面の願いであるという。

問2　中納言石上麿足が、家に使われる男たちのもとに、「燕が、巣を作ったならば知らせよ」とおっしゃるので、承って、「何のためであろうか」と申し上げる。答えておっしゃるには、「燕が持っている子安貝を取ろうとするためだ」とおっしゃる。

問3　栗という文字は西の木と書いて、西方浄土に関係があると、行基菩薩が一生杖にも柱にもこの木を使いなさるとかいうことだ。

問4　はしけ舟と名付けて、とても小さい舟に乗って漕ぎ回る。早朝など、とても趣深い。跡の白波は、（古歌にあるように）本当に次々と消えていく。ある程度の身分の人は、やはり（舟に）乗って出歩くべきではないと思われる。徒歩の旅路もまた恐ろしいようだが、それはどう言おうが地についているので、とても頼りになる。
　海はやはりとても不気味に思うのに、まして、海女が潜りに入るのはつらい仕事である。腰についている紐が、切れて

しまったならば、どうしようというのだろう。

問5　都ではないが、年の暮れには、我も我もとその〔＝正月を迎える〕準備をするのも、しみじみと思われて、

常よりも…＝いつもよりも心細く思われるなあ。旅先で年が暮れるので。

憂き身こそ…＝つらい我が身は嫌々ながらもしみじみと思われる。月を見て物思いにふけりながら年が暮れてしまうなあ。

年も改まったので、深山の霞も発生し、それと一緒に思い立ち、都の方へ行くときに、ある野原の中に、青柳でとても趣のある柳を周りに植えて、軒端には薄暗い感じに梅を並べて植えているのが、花が咲き乱れていたので、人々が引き留めないけれど、通り過ぎることができないほどの香りの慕わしさに、このみすぼらしい家に泊まった。

一人寝る…＝一人で旅寝をする移り香は、垣根の梅の香りであるのだなあ。

山賤の…＝山里に住んでいる身分の低い者が、片方が丘になった一帯を自分のものとする野原の境界に立っている美しい柳よ。

問6　源俊頼の言うことには、前の歌〔＝波が寄せる粗末な漁夫の家の隙間が荒いので、漏れることで知る、夜中の時雨は〕は、時雨に愛情がないように聞こえる。時雨は起きていて、朝まで聞くほどのものではないが、この歌は漏れるので、初めて知るというので、寝入っていたところ、漏れて服が濡れたので、起きて騒いだと思われる。もし漏れなかったならば、次の日、人づてに聞いたのだろうと、頼りがないものに聞こえる。

問7　豊の明かりの節会の夜、冴えわたっている夜明け方に（通宗中将が）参内なさった様子は、優雅だったが、まもなく亡くなりなさった悲しさは、どうしようもなくて、その夜の明け方、雲の様子まで、形見であることを、人々がいつも申し出るにつけて、

露ときえ…＝露のように消えてなくなり煙ともなる人は、それでもやはりはかなくなった跡の空を眺めもしているだろう

問8　星の光さえ見えず暗いときに、時雨が降っては、木の葉にかかる音が趣があるのを、「かえって優美で趣のある夜だなあ。

思ひいづる…＝思い出すことばかりがただ前例がないくらいだ。並一通りのはかないことを聞くにつけても。

月が曇りなく明るいようなのも、体裁が悪く恥ずかしいに違いないことよ」（という）。

問９

私の家が狭くてみすぼらしいのは言うまでもないが、山野およそ十里あまりの眺望があって、〈中略〉よく見え、橋も四つ五つ、行く人なども見え、月見によく雪景色もよいので、たいそうな美観であるが、良いとも悪いとも言わないで帰る人がいる。また折々に訪問する人でも、日々の様子は見たいはずなのに、障子をさえ開けずに帰る人がいる。俗人はそれでもよいだろう。詩歌のことなどを飽きるほど語り続けて、風景を見ないで帰るのはどういうことだ。〈中略〉

古今集に

女郎花…＝女郎花を吹いて過ぎてくる秋風は目には見えないけれど香りでわかる

これは女郎花の香りを嗅いで知っていたのだ。すべて梅の香りは言うまでもなく、藤の花、菊の花、どれも違う香りがするのを、昔の人はよく嗅ぎ分けていたのであろう。これも花を愛でる心からくることだ。この歌は、終句で「しるけれ」と詠んでいるが、ただ香りがするということだけであろうか。女郎花の香りであると嗅いで知っていたので「しるけれ」と言ったのだ。今の人とはとても違いがあることをわきまえなければいけない。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問1　オ　問2　エ　問3　エ
問4　ア　問5　イ　問6　ウ

二

問1　新院〔＝崇徳院〕のことを見届ける人が誰もいなくなってしまうから。

問2　雨の日に退屈をしのぐことができるほどの気が利く女だったから。

問3　いつも真面目ぶって非難してくる源氏の君が腹立たしく、忍んで通っている多くの女をなんとかして見つけたいとずっと思い続けていたから。

問4　天武天皇が吉野に世を避けた時、国を治める前兆として、天女が五人天からおりてきて、舞を舞ってなぐさめた例があるので、舞姫は五人のほうが良い例にのっとっているから。

問5　全員一緒に逃げると最悪全滅してしまうが、別々に逃げて誰かが生き残れば、その者が本来の目的を果たせると考えているから。

〈現代語訳〉

一

問1　今となっては、昔のたわいのない思いも後悔するのだなあとばかりすっかり思い知り、親が物詣に連れて行って参拝などもしないで終わったことも、ひどいことだと思い出さずにはいられないので、今はいちずに豊かな身の上になって、幼い子供も、思い通りに大切に養育し、私自身も倉に山となるほどの財力を蓄えるくらいで、来世までのことも考えようと思い励んで、十一月の二十日あまりの日に、石山寺に参詣する。

問2　屋敷から、使いをひっきりなしにおやりになって、「子安貝は取ったか」と質問なさる。燕も、人が大勢（足場に）のぼっているので怖がって巣にあがってこない。このようなことの返事を申し上げたところ、聞きなさって、「どのようにすべきか」と思い悩みなさっていると、その寮の官人くらつまろと申す翁が申し上げるには、…

問3　慎んで、嘘をつきなさってはいけないのだ。〈中略〉ただし、たとえば、猟師が鹿を追って見失って、「ここを鹿が通り過ぎたか」と聞いてきたなら、あの草の中にいるとは知っているが、「知らない」と言うようなのは、嘘であるはずがない。仏は、許しなさるのだ。総じてこのような嘘は、罪にはなるはずがない。この他の嘘は、よくよく慎みなさるべきだ。

問4　昔、空也上人が、比叡山延暦寺にいらっしゃったが、いつも、「ああ騒がしいなあ」とおっしゃったので、たくさんいた弟子たちも、慎んでいました。たびたびこのようで、ある時、（空也上人は）消えるようにいなくなりなさった。〈中略〉こうしているうちに、ある弟子が、すべきことがあって、市場に出ていましたところ、みすぼらしいむしろを張り巡らしている中に、人がいる様子がして、前に変なものを差し出して、食べ物の切れ端を受け取って集めて置いている人がいた。「どういう人なのだろう」と、そうはいってもやはり心がひかれて、寄って見たところ、行方不明だとしていた我が師匠〈＝空也上人〉でいらっしゃった。

「ああ驚きあきれることよ。『騒がしい』とおっしゃっていた上に、行方をくらましなさった後は、まったく世の中にまじっていらっしゃるだろうとは思わなかったことよ」と言ったところ、「もとの住処が騒がしかったが、ここはとてものどかで、思ったよりも心もいっそう澄むのでございます。…

問5　女の親が、少将におもてなしをすることができなかったので、（少将が）小舎人童だけを留めていたが、（その小舎人童

には）堅塩を、肴に酒を飲ませて、少将には広い庭に生えている菜を摘んで、蒸し物というものにして、茶碗に盛って、箸には梅の花で盛りである梅の枝を折って、その花びらに、たいそう上手な女の文字で、このように書いた。

君がため…＝あなたのために衣の裾を濡らしながら、春の野に出て摘んだ若菜よ

男が、これを見ると、たいそう心を打たれて引き寄せて食べる。女が、どうしようもなく恥ずかしいと思って横になっていた。少将は起きて、小舎人童を走らせて、（小舎人童は）すぐに車で実用的なものを、いろいろ持って来た。

問6 （道中で出会った武士が）「（お前たちは）本当に悪党に見える。命は塵芥のように思って暴れて歩き回っている。乱世であるならば、豪傑と評判になり、国を奪って、敵を恐れさせただろう。勇ましい」と言う。はん噲が言う。「盗人だといっても、命は惜しいぞ。財宝は得やすいが、命は保ちにくい。百年の寿命を盗む方法を知っているならば教えよ」と（言う）。武士がとても笑う。「財宝を奪われた者の恨みがないだろうか、いや、ある。朝廷は、そのような者を捕えようと準備している。人をも殺し、窃盗をたくさんして、報いの命が百年ということがあるはずがない。…

二

問1 家弘も光弘も、慣れていない御輿を、自身でかつぎ申し上げ、ここへあちらへとお連れ申し上げたので、すっかり力が弱り、動けるとも思えない。合戦には戦い疲れ、武具には（体が）押された。身の有様は、茫然自失だったので、「自害をしたい」と思うことが何度もあったが、「そうして、院の御事を誰が見届け申し上げるのか、いや、誰も見届け申し上げられない」と思ったので、よろよろお仕えする。院も合戦の紛れなので、お食事も召し上がらず、昨日も暮れて、今夜も明けようとする。（新院の）お体も弱りなさって、消え入る御心地だけを思いなさった。

問2 これも今となっては昔のことだが、白河院の御代に、北面の武士の詰め所に、気が利く女がいた。名前を六と言った。殿上人たちが、もてなして興じていたが、雨がしとしと降って、退屈だった日、ある人が、「六を呼んで、退屈をしのごう。」と言って、使いをやって、「六を呼んで来い。」と言ったところ、間もなく、「六を召し連れて参りました。」と言ったので、…

問3 頭中将は、この源氏の君が、たいそう真面目ぶっていて、常に非難なさるのが腹立たしいので、（源氏の君が）平然と、

こっそりお忍びになるところが多いようなので、なんとかして明らかにしようとばかり思い続けていたところ、これ〔＝源氏の君が源典侍のところに忍んでいること〕を見つけた気持ちはとても嬉しい。このような時に、少し脅し申し上げて、御心を惑わして、「懲りたか」と言おうと思って、油断させ申し上げる。

問４　良峰の宗貞と言う、六位の蔵人であるが、学識がある者で、帝の御心にかない、近くに絶えず付き添わせなさり、時々「漢詩を詠め」「和歌を詠め」と、ご寵愛をうけていたので、いつとはなく政治に関してもこっそりお尋ねなさったとかいうことだ。宗貞は賢くて、政治に関しては少しばかりもお返事を申し上げない。ただ、詩歌管弦の遊びに関したことを、「そうした例（がございます）」など、御心にかなうように申し上げる。

色好みの男で、華々しいことを好んだが、毎年の豊の明かりの節会の舞姫の数を、勧めて加えさせた。「これは、天武天皇が、吉野に世を避けなさったが、御国を治めなさる前兆として、天女が五人天からおりてきて、舞を舞って、おなぐさめ申し上げた例があるので、五人の舞姫が古い良い例にのっとっているのである」と申し上げる。（帝も）同じく色好みでいらっしゃったので、その年の冬を初めとして、宣旨がくだって、華やかにしなさった。

問５　入道〔＝為義〕が、泣く泣くおっしゃったことには、「今度の合戦の大将軍をお受けしたのも、我が身は年老いているので、たとえ思い出があったとしても、どれくらいの栄達を期待できるか、いや、できない。ただ、子供たちの将来を思ったからである。また、ただ今、首を延べて、恥を捨て、降参しようとするのも誰のためか。お前たちのためだよ。そうなので、どのような谷の底、岩木の陰に身を隠し置いて、私がなる有様を聞き届けなさるがよい。決して、同じ所へ逃げるなよ。一人や二人どのような事に遭って（死んで）も、生き残った者が、どうして本来の目的を果たせないだろうか、いや、果たせる。この中で、九郎は、まだ十五、六になると思われるので、弓の上下もわからず、まして、武略の道は、まったくわからない者なので、八郎〔＝為朝〕よ、これ〔＝九郎〕を一緒に連れて、一方で私の形見とも思って見ろ、一方では子供だと思うのがよい。そういうことで、早く早く（逃げろ）」と別れを告げたが、また涙にむせんで…

【第六講】

〔模範解答〕

一

問1　オ

問2　エ

問3　問一　ア

　　問二　ウ

　　問三　イ

二

問1　以前から、御息所は奥ゆかしく風情がある人だと源氏の君は聞いていたので、どんな人か心がひかれたという事情。

問2　帝の、大君が自分の他に誰かを思っているのではないかという問いかけに対して、大君が、帝を愛しく思う気持ち以外に何の思いもないと答えた。（六六字）

問3　少将と結婚しようが、このままでいようが、実母が死んだ自分にはこの先良いことはないだろうということ。

〈現代語訳〉

一

問1　近頃、和歌の道は、特にもてはやされたので、順徳天皇を中心とする内裏歌壇、後鳥羽院を中心とする仙洞歌壇、藤原道家を中心とする摂政九条家歌壇など、皇族も貴族も皆が、和歌をきわめなさっていた。臣下がたくさん知られていた中に、治部卿定家、宮内卿家隆といって、家の名が絶えることなく、和歌の道に名声を得た人々であったので、…

問2　時刻は午後二時頃になったであろうか。

のどかなる…＝のどかな日差しに冬を忘れて咲く花も、時節も小春の名前だから咲いているのだろうか。

保好

「そうならば紅葉のもとで、酌み残した竹の葉の露〔＝酒〕の名残をこの桜の花の陰でも（飲もう）」と、また盃の数を重ねたので、ひどく酔ってしまった。私は酔いのせいで眠気を催し、夢に見たのは、今いる所と変わらず、露が発生している山吹の花は言葉にできないほど素晴らしい色に咲いていて、夕方の光に輝く花盛りを見せ、梢の藤の紫色に、暮れていく春の名残を留め、田の蛙が季節を知っている顔で鳴くなど、すべて言おうとすると、くどくなるだろうくらいの三月の暮れの夕景色である。ああ、このようなときに花の色や鳥の声にも風情を表すほどの和歌が詠みたいと、狭い袖をあわせ〔＝ない才能をどうにか絞って〕、杉の柱にもたれかかり、たいそうひどく苦心していると、どこというわけもなく鐘の音が響いて酔いの眠りを覚ましてしまったようだ。

問3　「昔から今に至るまで素晴らしくいらっしゃる殿〔＝九条殿藤原師輔〕が、ただ（師輔の孫である）冷泉院の（気の病の）ご様子だけが、たいそう情けなく残念なことでいらっしゃる」と（大宅世継が）言うので、侍が、「しかし、何かの例としては、まずその冷泉院の御代を引かれるようだ」と言うと、（世継は）「それは、どうしてそうならないことがありましょう。その帝〔＝冷泉院〕が即位なさったから、この藤原氏の一門が、今に栄えていらっしゃる。『そうでなかったら〔＝冷泉天皇が即位なさらなかったら〕、このごろやっとのことで自分たちも諸大夫くらいになって、あちらこちらの御前駆、雑役として連れられ歩いていただろう』と、藤原道長がおっしゃったので、源俊賢は、『そのような（上品な）容貌をした諸大夫がお仕えしていたならば、どんなに見苦しいだろうか』と、笑い申し上げなさったそうだ。〈中略〉

（冷泉院には）御物の怪がひどく憑りついて、どうであろうかと（周囲にいらっしゃる人々が）お思いになっていたが、大嘗会の御禊で、たいそうきちんとしてお出ましになった。『それは、人の目に見えて、九条殿が（冷泉院）を後ろから抱き申し上げて、御輿の中にお控えなさっていた（からだ）』と、人が申し上げた。本当に（九条殿は）生前にもたいそう常人とは見えなさらなかったので、まして亡くなりなさった後には、そのように（冷泉院の）御守護霊として添い申し上げなさっていたのだろう。

（侍が）「そうならば〔＝九条殿が物の怪を退治する能力があるのならば〕、藤原元方や、桓算供奉の怨霊を、（九条殿が）払いのけなさるに違いないだろうな。…」

二

問1 天皇におかれましても、故宮のことを忘れなさらず、しみじみと思い出しなさっては、折々のお見舞いが、絶えずあった。源氏の君にも、「前坊の御息所が悲しく物思いにふけりなさっているだろうから、折々はお見舞いに行きなさいよ」など、言いつけなさったので、（御息所は）本当に奥ゆかしく風情がある人だと、以前も（源氏の君は）聞きなさっていたことなので、（気が重いが）一方では心がひかれると思いなさって、ある日、宮中から退出なさるといって、夕方に（御息所のところへ）いらっしゃった。

問2 お手紙ばかり、たいそう頻繁に、しみじみと細かく書き尽くしなさっているのも、本当にもったいなく思い知られては、…〈中略〉

いつもよりも、風までもが心細い夜、（帝の）御袖の氷も溶けにくく〔＝涙をひどく流しながら〕、夜を明かしかねなさって、まだ明け方の暗いときに、宮中〔＝帝〕から、

「片敷きの…＝一人寝の霜が冴える夜の袖にかかる涙の色を見せたい

寂しい（一人寝の）床は変わらない（私の状態）と、私ではない他の人への思いが（あなたには）湧いていないだろうか」

とあるのを、（大君が）待ち見なさる気持ちも、たいそうしみじみとして、つい泣きなさった。

「霜払ひ…＝霜を払って足で踏んで足跡をつける浜千鳥のような筆跡を見ても、愛しい思い以外には他にどんなことを思うだろうか、いや、思わない」
と、申し上げなさるのを、（帝は）たとえようもなく、愛しくお思いになり、ますます涙を流し添えなさった。

問3　姫君が一人で横になり、寝られないままに、「母君、私をお迎えなさいませ〔＝あの世に連れて行ってください〕」と、「つらい」と言いながら、…〈中略〉

翌朝、話をしているときに、（侍女のあこきが）「私の恋人の帯刀が帯刀の主人である少将が姫君と結婚したがっていると私に伝えてきたことを、どのようにしましょうか。こうしてばかりでは、どうして、一生を過ごせなさるだろうか」と言うと、（姫君は）返事もしない。困っているところに、「三の君の手を洗う水を差し上げなさい」と呼ばれるので、立った。心の中では、どうあろうが〔＝少将と結婚しようが、このままでいようが〕この先良いことがあるだろうか、いや、ないだろう、母上が亡くなったので、不幸なこの身と知って、なんとかして死にたいと思う気持ちが強い。尼になっても、この屋敷を離れることができないので、ただ死ぬ方法があればなあとお思いになる。

【第七講】

〔解答〕

一 イ

二 ウ・オ

三 **ア** A　**イ** B　**ウ** A　**エ** B　**オ** A

〔現代語訳〕

一 あれやこれやして越えて行くうちに、阿武隈川を渡る。左側に会津山が高く、右側に磐城・相馬・三春のかつて荘園だった名前が残っている地。常陸・下野の地を区切って、山が連なる。影沼という所を行くと、今日は空が曇っていて物影はうつらない。須賀川の宿駅に等躬という者を尋ねて、四、五日間留められる。まず、（等躬が）「白河の関はどのように越えたか」と問う。「長い旅路の苦しみで、心身疲れて、一方では風景に心を奪われ、昔のことに懐かしむ気持ちに耐えきれなく感動して、（感動のあまり）しっかりと思いをめぐらせない。

風流の…＝風流の初めは、奥州の田植えの歌（を聞くことから始まったの）だなあ

ひどく（白河の関を）越えるようなのもそうはいってもやはり（良くないので作った句である）」と語ると、第二句・第三句と続けて、三巻（の連句）となった。

この宿駅の傍らに、大きな栗の木陰を頼りにして、俗世を避けている僧がいる。（西行の歌にある）「橡拾う深山」もこのようだったのかと静かについ思われて、ものに書きつけます。その詞書は、

栗という文字は西の木と書いて、西方浄土に関係があると、行基菩薩が一生杖にも柱にもこの木を使いなさるとかいうことだ。

世の人の…＝世間の人の目にもとまらない花よ、軒の栗よ

等躬の家を出て五里くらい、日和田町を離れて、安積山がある。道から近い。このあたりは沼が多い。かつみ（＝あやめの一種）を刈る頃も近くなるので、「どの草を花かつみというのか」と人々に尋ねましたが、まったく知る人がいない。沼を尋ね、人に尋ね、かつみかつみと尋ね歩き回って、日は山の端にかかった。二本松から右に折れて、安達が原の鬼女が住んでいたという黒塚の岩屋を一瞥し、福島に泊まる。

夜が明けると、奥州信夫郡に産する、乱れた模様を布に摺りつけるために用いられた石を尋ねて、信夫の里に行く。遠く山陰の小さな里に石が半分土に埋もれている。里の子供が来て教えた。「昔はこの山の上にありましたが、往来の人が麦を荒らしてこの石を試しますのを（村人たちが）嫌がって、この谷に突き落としたので、石の表が下になって倒れている」と言う。そうもありがちな事だろうか。

早苗とる…＝早苗を取る手元は昔しのぶ摺り（をした手元と同じかと、昔が偲ばれるなあ）

二

順徳天皇の在位の時、警備の武士の小川定継という御信任があつい人がいました。第四番目の地位で、（定継よりも）身分の高い人を超えて長くお仕えしていました。

名月の夜、帝が紫宸殿にお出ましになって、管弦の遊びがあった時に、その定継の下人が、滝口の詰所近くの部屋の方の御馬屋のあたりで、居眠りをしていましたが、急に走って立って、中将実忠朝臣の綾小路の家へ、息せききって走って向かって言うことには、「たった今宮中へ、すぐに参上なさいませ。もっともっと、すぐにすぐに」と言った。

中将は、それほどの急用は、何事であろうかと不思議に思って、「誰の指図か」と尋ねなさったところ、（下人は）「小川定継殿が（帝からのご用命を）お引き受け申し上げなさっております」と言って、すぐに走って帰った時に、中将はあわて騒いで、急いで参上してお尋ねしたところ、（帝は）今紫宸殿にいらっしゃるとのことを、女房が申し上げるので、（中将は、帝の）御後ろの方で音を立て（て知らせ）ると、（帝が）「誰だ」とお尋ねになるので、実忠朝臣がお召しを受けましたので

参上したとのことを申し上げたところ、まったくそんなことはないので、（帝は）不審にお思いになって、詳しくお尋ねになったところ、使者が言ったとおり、定継がお引き受けするといって、そのままその（定継の）下人でございますとのことを申し上げたので、定継がお聞きして（下人に）尋ねると、なんとその下人が寝ぼけてこのように（中将を）お呼びになったのである。

（下人は）あまりに走ったので、二条油小路を南へ下りた時、土塀の角に走ってぶつかって、顔の突き出たところをぶつかってけがをしていた。

（定継が帝に）そのことを申し上げたところ、おもしろいこととして（とがめることなく）終わった。

定継が申し上げたことには、「これは尋常でないことでございます。寝ぼけていますからといって、そんなことをいたしてよいでしょうか、いや、よくない。思いもよらない凶事を引き起こしたら大変です」と言って、この下人をそのまま使わなくなった。

三

こうしているうちに、冬になったので、（平中は）ひどく退屈で世の中の恨めしいことばかり思うと苦しいのに、仏道修行は許されず、「心の慰めに、東国のほうに行こう」と、親に申し上げたところ、「やはり、この正月の司召〔＝官吏任命の日〕までは過ごしていよ。それでどの官職にも就けなかったら、唐土へでも行きなさいませ」とおっしゃるので、阻止されて待っていたところ、その任命の日にもむなしくどの官職にも就けなかったので、すっかり落ち込んで、そう言わずにいられない人〔＝女〕のもとへ言って送る。

浮き草の…＝浮き草のようなこの身は根を絶やしてきっと流れるだろう。涙の川の流れゆくままに。

とあるのを見て、そうは言ってもすぐには行き離れられないだろうと思って、（女が）返歌をし、

遅れゐて…＝先立たれてこの世に残されていて嘆くよりは、涙川に私が降り立とう。先に流れて〔＝死んで〕いけるように。

こうして、本当にこの男〔＝平中〕がどこかへ行こうと思っている様子を見て、親は、明けても暮れても呼びつけて、「人の世のはかないことをよく知っている（のに）、遠くへ行こうというのは、親を嫌うからか。それでもやはり、この正月の

司召だけでも待て」と、しきりにおっしゃる。思い悩んだまま過ごしていると、その司召でも官職に就けないことになったので、深く世の中をつらいことだとすっかり落ち込んで、宇多天皇の御母后のおそばに仕える召使いで、この男の知っている人のところに言って送る。

なりはてむ…＝なり果てるような身を待つ山のほととぎすは、今はもう限界ときっと鳴いて隠れるだろう。

とあったので、召使いたちはしみじみと感じて、「このように申し上げている」と后に申し上げたところ、この男の父はその后の甥であって、「罪も咎もないのに、役職を与えないままにさせておかれたので、地方の国にも隠遁し、（仏道修行に）山林にもきっと入ってしまうだろう」と、しきりに天皇に申し上げなさるので、「（平中が）宮仕えもせず、うわの空だったとして、懲らしめようと思って、（官職を）取り上げたのだ。今はきっと懲りているだろう」と言って、その司召の官位任命の追加訂正をする日に、もとの官職よりはもう少しまさったのをお与えになった。

【第八講】

〔解答〕

一
問1 ウ　問2 北東から南西まで　問3 エ

二
問1 ウ　問2 イ　問3 エ

三
問1 オ　問2 イ　問3 イ　問4 イ

四
問1 (一) 和歌　(二) イ　問2 目に見えぬ鬼神、猛き武士（順不同）

五
問1 Ⅰ ウ　Ⅱ ウ　問2 A こじとみ　B みす
問3 こうし　問4 (一) ウ　(二) オ

六
問1 ア　問2 中国　問3 **常州** 茨城県　**濃州** 岐阜県

〈現代語訳〉

二

問３　十月の初め、空がはっきりしない様子で、我が身は風に吹かれる葉のように行く先が定まらない気持ちがして、

旅人と…＝旅人と呼ばれよう、初時雨のときに

また山茶花を…＝また山茶花を宿ごとに眺めて

岩城の住人、長太郎という者が、この（山茶花の）脇句を付けて、其角亭で見送りをしようともてなす。

時は冬…＝時は冬だが吉野でつめよう旅のお土産〔＝旅のお土産に吉野で和歌を詠んできてくれ〕

この句は、内藤義英からいただきましたが、旅の餞別の最初で、旧友・親類・弟子たちなど、ある者は詩歌や文章をもって訪ねてきて、ある者は草鞋の料金を包んで気持ちを表す。

三

問３　誘う水があっちにあるならば、こっちにあるならば、と蛍が飛んでいるなあ

問４　あれやこれやして越えて行くうちに、阿武隈川を渡る。〈中略〉まず、「白河の関はどのように越えたか」と問う。「長い旅路の苦しみで、心身疲れて、一方では風景に心を奪われ、昔のことに懐かしむ気持ちに耐えきれなく感動して、（感動のあまり）しっかりと思いをめぐらせない。

風流の…＝風流の初めは、奥州の田植えの歌（を聞くことから始まったの）だなあ

ひどく（白河の関を）越えるようなのもそうはいってもやはり（良くないので作った句である）」と語ると、〈中略〉…

栗という文字は西の木と書いて、西方浄土に関係があると、行基菩薩が一生杖にも柱にもこの木を使いなさるとかいうことだ。

世の人の…＝世間の人の目にもとまらない花よ、軒の栗よ

〈中略〉

早苗とる…＝早苗を取る手元は昔しのぶ摺り（をした手元と同じかと、昔が偲ばれるなあ）

四

問2　目に見えない鬼神の心をもなだめ、猛々しい武士の心にもしみじみと思うのはこの和歌であると、古今和歌集の序にもございますのも、なるほどと思われて、…

※『古今和歌集』「仮名序」
和歌は、人の心を種として、多くの言葉となった。世の中にいる人、出来事は多くあるので、心に思うことを、見るもの聞くものにつけて、言い出したのである。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞くと、生きているものすべて、誰が歌を詠まないか、いや、詠む。力を入れないで天地を動かし、目に見えない鬼神をもしみじみと感動させ、男女の仲を和らげ、猛々しい武士の心をも慰めるのは歌である。

五

問1　その付近に土塀などが崩れているが、そうはいってもやはり蔀〔＝格子組の裏に板を張った戸〕などを上げて、簾をかけて渡している人の家がある。

問2　A　帝が小蔀〔＝小さな窓にある蔀〕からご覧になって、…

B　御簾〔＝貴人の部屋の簾〕の外にも出なさらず、…

問4　この天暦〔＝村上天皇〕の御代に、清涼殿の前の梅の木が枯れたので、…

六

問1　十一月の二十日過ぎに、近江国にある石山寺に参詣する。雪が降り続け、道中の様子までもがしみじみとして、逢坂の関を見るにつけても、昔越えたのは冬だったよとつい思い出して、ちょうどその時、たいそう激しく（風が）吹いた。

逢坂の…＝逢坂の関を吹く風の音は、昔聞いたときと変わらないなあ

〈中略〉三日間（石山寺に）参籠して退出した。

その翌年の十月二十五日、大嘗会の禊と大騒ぎしていると、…